

北大馬術部創立四十年紀念

寫

真

集



凜然たり壮年馬上の英姿

君、盡す碎身母校馬術部の為

温容能く若く等と導くこと久し

瞼を閉して君の青春乃涕ひ思い

眼を開きしときこの足跡を顧じ

古き友垣若く輩共々せしに

君小捧くこの思ひを草紙

東園基文書



半沢先生四十年の歩み



昭4 入会当時



昭11 北海道大会に於て



昭20 後期



昭34 北海道大会に於て



昭43 北海道大会に於て



昭49 現在 高千穂号に乗られて

半沢杯馬術大会



半沢杯争奪馬術大会



選手宣誓



記念植樹



第1回 半沢杯後のレセプション

馬 の い る 馬 術 部

太 秦 康 光

私が、馬乗りを始めたのは大正9年夏のことで、東大1年の時である。当時学生で乗馬をやっていたのは、学習院、東大、京大くらいのものであったが、東大では自馬などもっていなかった。青山にあった陸軍大学校は参謀要員将校の教育機関で、その将校学生の乗馬練習用として百数十頭の馬が飼育されていた。ところが夏になると、これらの将校が各連隊に配属され実地の勉強をやる。その間百数十頭の乗馬は失業状態となり、何十名かの馬丁だけでは運動にも事を欠くことになるので、一つ大学生に乘せてみたらというのが東大馬術部の由来らしい。だから練習はこの夏休み約1か月の乗馬演習が主であったけれども、他の期間も陸大の都合のつく限り日曜祭日等には乗せてもらい、時には多摩川の二子渡しあたりへ遠乗もやったものである。

大学を出ると皆志野の騎兵15連隊に入隊して文字通り馬と寝食を共にし、兵役を終った後も東大の研究室にいた関係から、陸大の乗馬演習はずっと続けていた。

札幌に来たのは昭和5年の春であるが、北大に理学部ができるから行ってみないかと恩師にすすめられた時、参りましょうと返事をした私の頭の中には、北海道へ行ったら大いに乗れるだろうという考えのあったことは否めない。ところがいざ来てみると、附近に乗馬隊はなし、民間の乗馬熱もあまり盛んではないのでいさゝかがっかりしたのであった。

新しい理学部化学科の学生は僅か15名であったが、その中には現学長の丹羽さんやわが馬術部の半沢さんの顔も見えた。当時のことゝていずれも金ぼたんの制服姿で、よくわが家へも遊びにみえたが、これが半沢さんとのそもそもの馴初めである。半沢さんとの話は当然馬のことに及び、その年の3月北大にも馬術部ができたことを、半沢さんを通じて始めて知ったのであった。

当時は獣医学部というのはなく、農学部で畜産学科として獣医学の教育が行なわれていたのだが、その畜産学科の必修科目として、「乗馬及馬匹調教実習」というのがあり、そのために十頭程の乗馬が繋畜されていた。馬術部員はこの馬を借用し、また月寒の歩兵25連隊にもお願いして練習をしていたのである。半沢さんからこんな話を聞き、それではというので早速長靴を新調、何とかわが欲求不満を解消することができたのであった。

昭和14年3月、多年部長を勤められた黒沢先生が公務多忙のため部長を辞され、その後任として、私が部長に推薦され、以来定年退職するまで23年間この席を汚したのである。その間管間君の全日本制覇、岡田君のインタハイ優勝と楽しい思い出も多けれども、一方頭の痛いこともあった。私が部長となった翌々年にはわが国は太平洋戦争に突入、その後戦局の進展に伴い25連隊は樺太に移駐して終りし、農場の馬も馬糧の欠乏から一頭減り二頭減りして、到底まともな乗馬練習などできなくなった。終戦後は尚更のことで、馬もコーチャーもない馬術部となり、開店休業の状態になって終わったのである。

昭和29年8月には札幌で第9回国体が開催され、私も馬術の方の委員長を勤めて晴れがましい入場行進などを行ったのだが、国体の馬術では地元で20頭の馬匹を用意することになっている。札幌大会の場合にも、既に前年からこの準備が始まり、中央から2名の調教師が来道、競技用の馬の調教に当った。そのお蔭で大会も滞りなく終了することができたが、20頭の馬の中にはなかなかいい馬もいたものだから、会が終わると本州から来た選手のうちには、是非馬を譲って欲しいという人も出て来たらしい。黙っていると折角の良馬が皆よそへさらわれて終うという心配が出て来たのである。

わが馬術部では、前々から自馬繋養の計画があったので、この際国体の馬何頭かを大学で買ってもらうということになった。私は学長室に赴き、島先生に事情を述べて、5、6頭の自馬購入を懇願したのである。多少の迂余曲折はあったが、このことは結局OKとなった。たゞし私が5、6頭をお願いしたのだから、島先生は5頭と考えるおられたらしい。ところが話が煮詰った段階で、では6頭お願いしますといったものだから、先生「何、6頭」と目をむかれたことを覚えている。これは内緒話になるが、島先生には学長の任期もあと僅かという時だったので、我々のいうことも割合によく聞かれ、苦笑いのうちに結局6頭購入を承諾されたのであった。この自馬購入については、松本久喜教授などが充分根まわしされたことは申すまでもないけれども、とにかくこうして『馬のいる馬術部』となったのである。そしてこの時入った馬は、その後わが部で相当活躍したはずである。

右の話に出た松本教授は大分前故人となられ、また最近には黒沢元部長も他界された。ここに心から冥福を祈って筆をおく。

半沢先生御退任記念写真集の発刊に際して

馬術部長 河田 啓一郎

すでに御承知の通り、第6代馬術部長半沢道郎先生には、昨年4月1日をもちまして本学を御退官なされますと同時に、体育会の規定により馬術部長をも御退任なされました。

今更申し上げるまでもなく、先生はこよなく馬を愛され、文字どおり我が北大馬術部と共に歩んでこられた方でございます。すなわち先生は昭和2年北大予科御入学の翌年馬術部の前身である北大乗馬会に入会され、学部に進入された昭和5年には初めて北海道帝国大学文武会馬術部を創設された部員の中心として御活躍になられました。御卒業後はOB会員として、また北大乗馬同好会員として、乗馬に親しまれたばかりでなく、各種競技に卒先出場されて常に優秀な成績を挙げられ、現役部員を身をもって鼓舞激励して下さいました。さらに昭和37年以降は御退官まで十有余年の永きにわたり第6代馬術部長として献身的に部の運営を御指導下さいました。

この間、昭和40年前後の馬術部の財源難、第1農場から学生部への所属移管問題など、部の死活にかゝわる幾多の困難に対処して、大学本部、学生部、第1農場などと精魂を傾けられて交渉に当られた結果、学生部への移管を達成して現在の健全財政の基を築かれました。さらに、この問題解決後学内の施設建物計画の都合により、思い出多い馬場、厩舎、部室の移転を余儀なくされるに至り、これの代替施設の獲得のため、先生は再び日夜身のやせ細るような御心労、御努力を重ねられて大学当局との交渉に奔走下され、今日キャンパスの1等地に他の運動クラブが羨むような立派な馬場と厩舎を作って頂いた次第であります。

先生のこのような偉大な御功績に対し、馬術部としてどのような方法によっても感謝の意を尽すことはできないのでありますが、幸いこのたび、40数年にわたる馬術部の輝かしい歩みを写真集の形で編纂し、先生の多年にわたる御指導に対しまして、万分の1の謝恩の心を捧げることができますことは洵に慶びにたえないものがあります。

先生におかれましては、古稀、米寿までも御健勝で馬に乗って頂き、末永く馬術部をお導き下さいますようお願い申し上げます。

最後にこの計画の立案推進に多大の御努力を傾注されたOBならびに現役部員の諸氏、また趣旨に心よく御賛同下され絶大な御協力御支援を賜りました各位に心から厚く御礼を申し上げ、記念写真集発刊の御挨拶と致します。

半沢先生のス、キノに於てモテる理由の考察

歯科医師 庄内貞夫

兎に角、素朴で純情で、人を疑うことを知らず、而も大学教授らしくもなく世間一般どこにでも、棲息する人種であるのが、我が親愛なる半沢道郎先生である。

毒舌の大家を以て自負している小生と、この温厚なる生先との組合せは馬乗り仲間では七不思議の1つでもあるらしい。よく2人で薄野へ出かける。2、3軒は必ず廻るハシゴ酒で大体看板まで飲む。女給がキチット見送りすると気嫌がよい。

私は先生より4ッ程若いし、女のクドキにかけては自他共に許している免許皆伝の筈であるが、なぜか先生とご一諸すると私より先生の方がもてる。

こっちは、いくらお世辞にも美女とは申せない年増女給(ブルトン。ペルシュロン)の酌で飲むのに反し、先生は美女(アラブ。サラブレット。アングロアラブ)の酌で、終始ニコニコして盃を口にす。

こっちは腹の虫が治らないから毒舌をはく。ブルトンだって馬だ、1米位は飛べるだろうとやるから益々もてない。

先生は落ちついたもので、あの独得のやさしい声で、馬を愛撫する如くオーラ、オーラとあわてないし女給を決して侮べつしない。若い牝のサラブレットもこれには弱い。誠心(マゴコロ)こめたサービスをする。

それに反し小生のブルトン、ペルシュロン嬢のハミ受けの悪いこと。牛飲馬喰どころか馬飲馬喰である。脚や坐骨の推進をやっている内にメートルはグングン昇り、目が廻ってくる。この時先生、少しもあわてず「もう1軒廻ろうか……………」と、のたまわれる。

私は先生とお付合させていたゞいてからかれこれ25年になる。

この間、幾度か壮年組障害飛越競技で対峙した。場内は最高にわき上り圧倒的に先生の応援が多いせいか私は1度も勝ったことがない。それも必ずと云ってよい程1落下の差である。

こんどは負けなぞと、張切れれば張切る程低い奴を、コトンと落下してしまおう。

先生の乗馬姿勢はご立派とは申せない。私の様に注文した体に合った服装ではないし靴だって10年以上は履いていると思われるものであるし、帽子も私の様なヘルメットではなく、あの独得な之も20余年を経たであろう型もくずれたハンチングである。

「いや、悪いネ」と云っては1等賞をとってしまう。

理由は簡単である。馬に逆らはないし必要以上に馬をせめないからである。

こう考察してくると、先生のス、キノでもてるのもこのせいかも知れない。

又、北大にあの立派な厩舎と馬場を構内の1等地に建てさせたのも、半沢式騎乗法で大学関係者や文部省のジャジャ馬を乗りこなした結果のようにも思われる。

先生は今でも私の調教している新馬に週3回は乗ってお手伝いをさせていただいているが、印南先生の馬術読本や、馬事公花の千葉さんの著書をお読みになって、私にむづかしい質問をされるのはほとんど参る。

研究して乗る。この態度。若い者達よ、よく見習いたまえ。

私も見習ったら、も少し薄野でもてるようになることはよく解ってはいるが……………。

何れにしても、お元気でいゝ按配である。

雑言多謝。

ね ん り ん

佐 合 義 弘

馬と人、人と馬と人、そして人と人、馬をメディアとして生れる人間関係、そのなかには極めて短期間のふれあい、長い間の親交、いづれも人の心のなかに蓄積されていく何かがある筈。

私が北大乗馬同好会に入会したのが昭和30年の春、思えばもう20年も前になる。北海道で開催された国体、この事をきっかけに馬術部の自馬繁養、丁度馬が入ったばかりの時に入ったのだった。

同好会のメンバーは今は散って各所に移られてしまったが、当時は土曜、日曜に必ず馬場に顔を見せていた、下飯坂さん、渡植さん、今はオヒゲのおじさんだがその頃はまだ大学院の正富さん、弘前に移られた斉藤善一さん通称ぜんちゃん、そして少女だった滝沢の「迪っちゃん」田中少年、この常連メンバーに半沢先生、又、たまには顔を出し北斗によく乗られた太秦先生、思い出せばなつかしい当時の顔が次から次とうかんでくる。

馬場は蹄跡だけ草が踏まれてなくなって、馬場の中はまだ草だらけ、馬が草を踏んですべる事もあった。皆んな熱心に練習にはげんでいたものだ。春と秋には現役と同好会の定期戦、不思議と同好会が強かった。私も及ばず乍ら「北楡」でずいぶんかせがせていた。 「北楡」と言えば私と北楡とは特別の間柄、馬術部の馬が何度か入れ変わったが私には「北楡」が1番なつかしい思い出が多い。千葉幹夫氏が入って来てからは彼も「北楡」によく乗っていた。私が入会した当時の主将は大久保君だったが、1番印象に残っているのは今浦河にいる鎌田さん、その頃はまだ「榊原」だった。毎年1年目が入部して間もなく合宿が始まる。私は当時北大生協の食堂の仕事をしていたので合宿中はよく炊事の手伝いやら、材料の仕入れを安くし部員に喜ばれた。今でも当時の部員がその頃をなつかしんで便りをくれる。

30年史がついこのあいだできたと思ったらもうあれから10年もたっている。馬術部の歴史と共に半沢先生の馬歴がある。馬術部の今日はその大部分が半沢先生の御尽力による所が多い。先生の部長在職中1番御世話になったり、御迷惑をおかけしたのが私だったかも知れない。

数えきれない歴代の学生諸君の汗と力、それをまわりから支援した先輩、そして半沢先生を始めとする同好会や個人の方々、多くの人たちの努力で今日ある事を忘れないで今後の奮闘を馬術部に御願ひして筆をおく。

自馬繫養と馬場、厩舎の新築移転問題

半 沢 道 郎

昭和38年部長在任僅か一年余で鹿児島大学にご転任になられた松本久喜先輩の後を受けて、私が第6代の部長（顧問教官）になり、昨年4月退官まで10年間在任した。昭和3年1月に北大乗馬会に入会してから実に45年の長い歳月を北大で馬と共に過ごして来た。その間昭和5年には文武会馬術部の創設に参画し、永井、高松、黒沢、太秦、松本の歴代部長先生の下に、部の先輩として、また顧問として、部員諸君と共に部の運営に微力を尽して来た。

長く部に関係したお蔭で退官に際して種々の記念の行事をして頂く光栄に俗し、全く感謝と感激で一ぱいである。松本先輩は早く亡くなられたが、昨年暮と今年の三月に黒沢、高松両先生が相次いでお亡くなりになられ、切角のアルバムもお目にかけることが出来なくなった。誠に痛惜の至りで茲にお世話になった先生と同級生の九鬼君を始め物故された部の関係の諸兄に対し新たにご冥福を祈る次第である。

幹事の加藤公敏君から部長時代の思い出を書くよう依頼を受けたのであるが、今回は馬術部の馬の繫養問題と馬場、厩舎の新築移転の事に就いての裏話しを述べて責を果すことにする。

昭和29年に第9回の国民体育大会の馬術競技が札幌の競馬場と円山の総合グラウンドで催されたが、その時の貸与馬競技用の馬の中から6頭が当時の学長の島先生と杉野目先生、太秦部長、松本先輩、部員の大久保君等の尽力によって北大に払下げを受け、待望の自馬を持つことになった。さてその馬の繫養について松本先輩が第一農場の第一畜産部の主任をして居られた関係で、農場の古い農耕馬用の厩舎に入れて頂くことになり、農場に居た二頭と合せて八頭を部で使える馬として部員が飼養管理一切をすることになった。部室も牛が居なくなった牛舎の一部を使わせて頂くこととなり、戦前に農学部畜産学科の学生が正課として実習をしていた馬場を自由に使えることになった。畜産学科で乗馬実習が行われていた頃には常時数頭の乗馬が繫養され、教官が配属されていた。塩野谷氏、荒野氏、岡田君の厳父の元八氏等が居られ、馬はハックニーやギドラン等の中半血種が飼われ、時にはハックニーの種牡馬（コッチングムキング号）やアラブ種の牡馬（影雨号）等も居た。荒野氏が仙台―東京間の長途騎乗に出場された釧山号、悍の強い青毛の宮武号、騎兵隊から来た大正号（私が騎兵隊の合宿で宛がわれて乗った馬で、滝曹長が調教されたスペイン常歩をやる調教された馬であったが、老令馬で余り長く居なかった）その他蘭高号等々思い出多い馬が居たが、その他に3、4頭の耕馬と土産子や驢馬や驢馬の実験用馬が飼われていた。戦時中に学科課程の改正等によって乗馬実習が無くなり、乗馬も居なくなってしまった。

馬術部用馬となった馬は大学の備品として、他の動物と共にその飼育費は予算化されて、全部農場の会計に入ることになっていたため、最初のうちは農場で生産された乾草、燕麦、寝わら等が支給され、

不足分を部員のアルバイト収入などで補っていた。然し農場自体の経費予算が少なく、農場生産の飼糧等も実験実習その他の都合で余り潤沢には配給されなくなり、購入飼糧の増加と共に馬術部の馬は邪魔物扱いにされる様になった。松本先輩とご一緒に大学本部の会計課に度々出かけて農場に配付される予算の増額や臨時の出費を依頼して急場を凌いだこともあったが、切角増額されても一旦農場の会計に入ると他の部門にも廻されて、部の馬の飼糧その他の経費に充当されるものは僅少となり、外註した飼糧や寝わらの代金はアルバイト収入や先輩の援助等によって支払わなければならなくなって来た。それでも松本先生の在任中は農場から部に必要な量の大半を苦面して呉れたが、先生が辞められてからは、それまで先生が無理をされた反動もあって、農場では馬術部の練習用馬の繁養を全く厄介視するようになった。農場の籍になっていた乗馬が更新の為に離厩するとその処分は農場でやられ、新しく入って来る馬は付属実験牧場から保管転換のものは別として、部で購入したり寄贈を受けたものに対しては、備品として受け入れることを拒まれ、切角寄贈を受けても寄付採納願を受け取って貰えない始末で、本部の備品として貰う様交渉しても農場との関係もあって受け入れて呉れないので、止むを得ず無籍のまま厩舎に繋いで飼育する状態になり、次第に無籍の馬が多くなった。従って正規の予算で飼糧代が本部から農場に廻って来ない為に飼育費は赤字となり、業者の犠牲でその場を凌ぐ有様で、厩大な赤字を抱えた当時の部員の苦悩と努力は誠に気の毒であった。本部の会計や学生部にも度々出頭して、農場から離して本部の所管にして欲しい旨を申し入れたが、当時の学生部長の星教授は音楽の課外活動ではバイオリンの弦は自分で購入するのだから、馬の飼糧代は部員で支払うのが当然だろうと云われ、それが出来なければ支給される予算の中で飼育出来る様に馬の頭数を減らせばよいではないかと云われ、厄介ものを学生部でしよい込むことを敬遠された。また北大には立派な農場や牧場があるのだから、馬の飼育は当然そちらで面倒を見る可きであって、本部でやるのは筋が通らないとして、専ら学生部から農場にお願いする形で過ぎて来た。田口、明道両農場長、八戸、広瀬両教授や農場の事務の方々には大変ご迷惑をかけた。時には叱られた事も度々あったが無理を通して農場に置いて頂いた。第一農場の建物の改築が決まり、馬場に工学部の建物が建てられる事が決定されてからは、暫定的に農場施設を使わせて貰っていたが、次第に農場との関係が薄くなった。

15年間馬術部の住み家であった第一農場の古めかしい建物も、ポプラ並木の横に手稻連山を望み乍ら、毎日の練習や多くの競技会をやった思い出の馬場も、もう見る事が出来なくなってしまって、本当に名残り惜しい淋しさを感じるが、過ぎ去ったいろいろな場面が脳裏に深く刻まれていて何時も懐かしく思い浮べることができる。

北大の諸施設が次第に拡充整備されるに及んで、従来農学部農場用地であったところが、次々に本部や他学部の施設の用地に転換され、広大さを誇っていた北大の構内も狭隘になって、第一農場の建物のあった部分は理学部に、馬場は工学部に移されることになって、老朽の甚だしい厩舎や牛舎は取り壊すことになり、馬場には工学部の瞬間強力パルス状放射線発生装置研究施設が建設されることが決まって、厩舎、部室、馬場の新築移転の実施の問題が急に表面化し、大学本部としても本腰を入れて具体化を計って呉れることになったが、馬術部としては以前から前述の様に農場から厄介者扱を受け、農場の生産物の供与が無くなった時点で、既に所管を本部(学生部)に移し、農場と縁を切る

方がお互に都合がよいと考えて、農場用地でない本部管轄の土地に移転することを希望して来た、総合グラウンドの設置が計画された頃に、松本先輩が総合グラウンドの内で、第一農場に接した端の処に馬場と厩舎を移す計画を本部に持ち出されたのであったが、時機的な問題で総合グラウンド建設の最初の計画には取り上げられなかった。其の後学生部では現在の硬式野球場と軟式野球場の間の処と、硬式野球場の西側全部を馬術部用にすることに殆んど決められたのであったが、冬季オリンピックが札幌に開催されることが決定するに及んで、トレーニングセンター（現在は北大に所属する体育指導センター）が急拠建設されることになり、馬術部用地をそちらに当てることゝなって沙汰済みになってしまった。前述の工学部の共同利用施設に予算がついて機械も発注され、責任者の小沢教授から馬場の移転を度々催促されるようになり、小沢教授からも本部に交渉して頂き、私も度々本部に出向いて早期実現を要望した。本部としても切角予定した候補地を取り上げた手前もあって積極的に用地を探して下さることになった。

然しいざとなるとさすがに広い北大構内もいろいろの問題があって、そう簡単に決めることができない有様で、何度となく構内を歩き廻り、時には部員諸君と一緒に探して、私の案としては旧第二農場の牡牛のバドックであった処（現在馬場のある場所）を馬場の用地として本部に希望を申し入れた。その場所は第二農場の古い建物が文化庁から重要文化財の指定を受けたために、農場から本部に移管された土地であって、移管の際に当時の農学部長の石塚教授と農場長の明道教授から本部に対し、将来建築物は建てないこと、地表の牧草は家畜飼糧として農場で使用する等の条件を付けられてあった。牡牛のバドックは大きな石が入って居て牧草畑にはならないし、唯遊ばせて置く位なら馬場にすれば広場として残り、風致も害われぬし、牧場の紛囂気にも合うなどを強調し、文化庁にも出頭して内諾を得た。本部の官財課でも遂に馬場として使用することを許可して呉れた。厩舎と部室の建設用地は未定であったが、馬場と厩舎の新設費の予算獲得について、経理部長の前田氏（現在帯広畜産大学事務局長）が積極的に文部省に接渉して下さり、設計その他について企画課長の中島氏も真に好意的の援助をして頂いた。

馬場は東西80m、南北40mの角馬場とし、地表から30cm位下に排水用の土管を2m間隔で南北に並べ、土管の上10cm位土を均しその上に10cm位火山灰を敷いて圧縮した上に砂を10～15cm敷く設計で、工事が44年の 月から始められた。土管の工事には学生のアルバイトを頼み、火山灰は長沼附近のものを運び、砂は競馬場の走路のものと同じものを指定して入れて貰った。馬場の周囲には排水溝を太目の土管で囲んで馬場内の排水管と接いで西側に導く様にした。東側の三角地には砂を入れなくて、岡田君（当時札幌市土木部長）に頼んで市の道路工事の排土をトラック20台分位を運んで頂いて、小山やバンケット等不整地を造った。また周囲の埒の支柱は当時の札幌競馬場の大木場長にお願いして、走路に使った古いものを無償で頂いて、コンクリートの土台に埋め込んで造った。北18条の市道に面した場所が場所だけに通学の学生や通勤の職員には大がかりの地均作業を見て一体何が出来るとか注目されたようで、後で馬場が出来たのを見て驚いた人が多かったそうである。

この様に馬場の方は順調に進んだのであるが厩舎については紆余曲折があって、簡単に進まなかつ

た。私は最初は成る可く費用のかゝらないようにと考えて、学内の既設の建物を既舎に改造することを計画し、先づ重要文化財に指定される前から第二農場の不用の建物を狙って種牡牛舎を改造することを本部に申出た、最初はこの建物は重要文化財に入っていなかったのが、文化庁の人が実地を見に来て、ついでに文化財にさせられ、部室に使い度いと考えた旧の製乳所のレンガの建物も、第二農場の事務室も同じ運命に会ってしまった。文化庁に出かけて文化財の使用の可否を問合せたところ、文化庁では唯遊休施設として保存しなくても、原型復することが出来る様に手を加えて、有効に使用することは差支え無く、既舎として使用することは構わないという意向であった。我が意を得たりと本部の管財に交渉したところ、学生に責任を持たせることは出来ないということで使用は認められなくなり、第二候補として獣医学部の東に残っていた古い建物を狙ったが、申出た時には既に取り壊しが決定し書類が本省に到着した後であって、今更撤回する訳には行かないという事で、これも不成功に終わった。

前田経理部長は既舎の新築費も何とか獲得してやるという事になって45年の2月頃に700万円位を取って下さった。新しい既舎の設計に当って競馬場の競走馬の既舎を参考として最初は10~12頭分の馬房を1列にしたものとし、両袖に部室と物置をつける様にし、大木場長に競馬場の新設舎の設計図を見せて頂いて本部の施設部と交渉をし、設計を依頼した。本部では1列だと費用が嵩むというので、6頭向い合せにすること、予算の範囲では物置を取る余裕のないこと等で、現在建った様なものに落着いた次第であった。馬房の床についていろいろ検討したのであったが、これも予算の都合で理想的なものにすることが出来ないで、一番安価な赤土にニガリを混ぜて掲き固めるだけにし、屋根裏に乾燥や寝わらを貯蔵する様にし、部室の上は畳を敷いて数名寝泊り出来る様にした。予算が決まっていた面積が限定された為に狭隘で余裕の無い建物になってしまった。

設計図を部員に見せたところ、私が無理に水洗にする様に頼んで造ることにした便所を、不潔だし、掃除をするのが嫌だから、便所を止めて物置場を拡げて欲しいと云い出し、小栗君までが本気で申し入れられたのには一服した。私が行った時に使うから造る様にといい、掃除も私がするという事で納得して貰った。出来上ったら不要だと云った者も結構用を達して居るようで、掃除もやっている様なので私は約束を果さないで退官してしまった。最近少し汚れた様なので近い中に掃除に行かなければと考えている。

既舎の工事に関して余り足繁く本部に顔を出したので、私の顔を見るとまた来たのかと迷惑そうな顔をされるようになった。

設計図が出来上り、仕様が決まり建設業者も決まってから、建設場所の選定が問題となって用地のなかなか決まらない有様であった。先に古い建物を改造して使うことを考えた建物のあった本部の所管の獣医学部の東端の処は馬場にも近く最適と考えて、獣医学部と交渉したのであるが、将来近くに小動物の飼育舎を建てることになっているとか、放射性同位元素の研究棟を造るとか、本館を増築する時に差支えるとか、当然獣医学部の用地に入る区域だという事で賛成が得られなかった。次にその少し北側に低温研究室に入る道路に沿った第二農場の所管のところに眠をつけたのであるが、低温研究所では玄関の真正面にそんなものを建てられては困るというので反対され、また農場では其処は以

前に患畜の隔離病棟があった処だから止めた方が良かったらという事で其処も諦めることとした。次に中央通りのつき当りの官舎の建っている処は近い中に官舎を取り壊すことになっているから、官舎を取り除いた後を使わせて貰い度いと考えたが、取り壊しの時期が大部先になるという事で駄目になった。次に恵廸寮の西北の原始林の中の空地（自動車部の用地の西）を狙ったが、其処には旧土人の住居の跡があるという事で自然保護や北方文化関係の先生方の反対があり、自動車部の施設をした時にいくつか損われたとか、本部で武道館を建てる計画を樹てたけれども使えなかったという事で全然問題にならなかった。次に少し東に出て恵廸寮と北18条の市道との間で、前に池のあった処で、自動車部の手前のところに目を付けたのであるが、寮の食堂や炊事場の近くに動物を飼うのは不衛生であるという事で学生部の更生課から反対され、強行して学生運動の好餌にされても困るという事でこれも断念、次に総合グラウンドの最北西端の空地は相当に広く、舎ばかりでなくパドックや小馬場を併置しても充分余裕があるから其処に決めては何うかということで本部でも其処なら他に影響が無いからと勧められたが、馬場に出て来る直通的通路が無く、冬の除雪も出来ない状況で、徒歩で雪の中を往復するには余りに遠すぎるということゝで断念せざるを得ないことになり、愈々思案に窮して建物を建てないことになっている旧第二農場事務所と新設した馬場との間にある林の内に建てて貰い度いと考え管財課に申出たところ、約束だから絶体に建物は建てられないと云われた。全く萬事窮する形となり当時の大学の施設委員会の委員長であった大野工学部長に善処方をお願いすることにして、ご相談に行った。大野教授は軍隊生活を野砲隊だったか輜重隊で送られ馬の飼育管理については良く知って居られ同情をして下さり、委員の方々に古い厩舎を見られ環境衛生上のことも考えられて、重要文化財用地内に建ててもよろしいが樹を伐り倒す事は駄目だという事で、出来上がった馬場の内の西側（現在の位置）に建てることを提案された。私は切角出来た馬場を縮小する事には不満であったので、極力林の内か種牡牛舎の東側に建てて欲しいと説いたのであったが、ゴタゴタ云ってれば結局建たなくなると驚かされ、大野先生の裁量によって現在の処に建てることに決められた。大野先生は自ら予定個処に縄張りをして位置を決めて下さる有様で、ご一緒に現地に行ってもう少し道路に寄せて奥の空地を広く取ることや、出来るだけ西に寄せて馬場との間を広くする様にお願ひしたのであるが、建築工学の大先生には全く歯が立たないで先生の云うなりに決められて了った。

結局建物が建てられない事になっていた処に建物が建てられたが、お蔭で馬場が80mの長さが64mに縮小されてしまった。その補いに馬場に隣接した三角地に20m位延ばして飽く迄も80mの長さにし度いと思ひ畜産学科の広瀬教授に地上権の害愛方を申し出たが、農場側の事情で拒否され、競技会を挙げる場合に臨時に準備馬場として使う事の許可を得たが、将来農場の事情が変わった時には馬術部に優先的に使わせて欲しい旨を述べて来た。

愈々厩舎が建ったところ文化庁の方で厩舎の西側に厩舎スレスレに金網の垣を造ることになり、支柱を立てる穴を堀り始めたので、パドック用地が無くなるので慌て、早速施設部から文化庁に電話をかけて貰い現在の地点まで西に寄せて垣を造って貰う事が出来た。間一髪余りにアッサリ変更して呉れたのには驚いたが、文化庁の好意ある配慮は本当に有難く嬉しかった。

退官を間近かに控え、背水の構えで、方々にご無理をお願いしたので、今振り返って随分厚かまし

いことであったと冷汗の出る思いである。

お世話になった多くの方々のご厚意に対し心からお礼を申し上げる次第であります。

北大馬術部の歩み



二代 高松正信



初代 永井一夫

歷代部長



五代 松本久喜



四代 太秦康光



三代 黒沢亮助



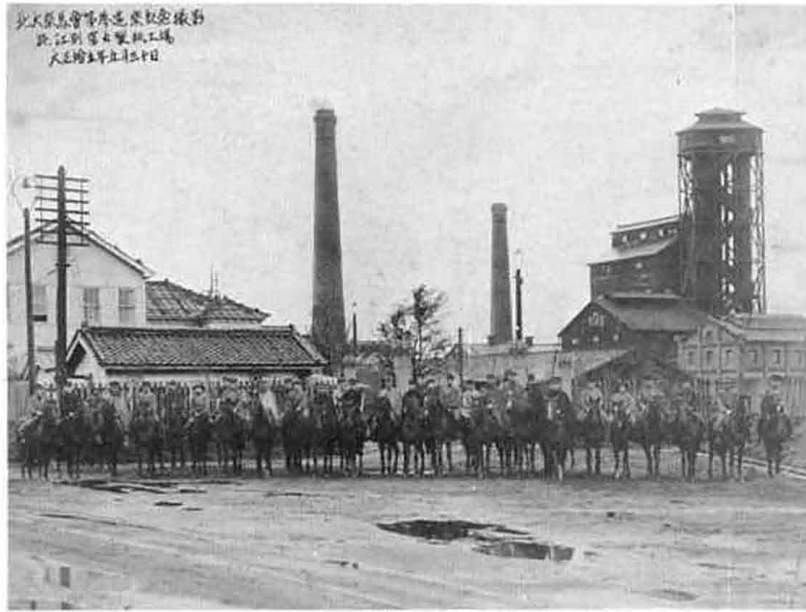
現 河田啓一郎



六代 半沢道郎

激動の四十余年

乘馬会時代



北江別荘工場
大正十五年五月二十日

大 15・5月30 第3回遠乗会



第3回旭川合宿 昭2・3月



左 同



中 同 手入れ



昭3 旭川乗馬大会



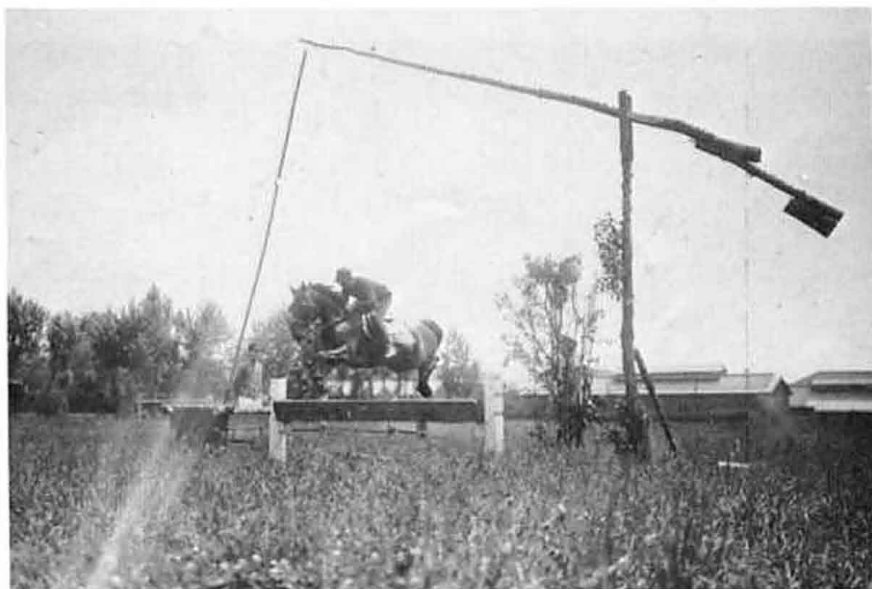
昭4 乗馬会時代 送別会



昭5 月寒25連隊にて練習



昭5 送別会



昭5 永松氏の障碍飛越



昭5・3月 於旭川騎兵連隊

北大乗馬会発足当時の思い出

中野友二郎

北大乗馬会第2次幹事長、平山常介氏の説の通り、乗馬会の発足は軍事研究という名目がなければ発足出来なかったと思う。

野間口、沢田、平山三氏が如何に苦心して乗馬会が発足せられたか、そして中村、大塚両教官のご努力がどんなであったかを思い出してみよう。

当時は中学校では兵式教練という教科で最新式の三八式歩兵銃、軽機関銃で、現役兵にも劣らぬ位の訓練を受けたものだが、予科に入って驚いた事には屯田兵時代の村田銃をかついで、その出立ちたるや羽織袴に雪駄ばき、中には麦藁帽子までかむって、右向けと号令がかかれば左を向くし、廻れ右と云う号令がかかれば足早に歩いて、生垣の向う側へ行つて了う者もある。さすが日露戦争の奉天城一番乗りの勇士、中村大尉、現役当時は機関銃隊付、大塚中尉も困って居られた。

尤もそれから2年を経た大正15年には、どういふ風の吹き廻しか手の平を返すような状態で、相変わらず村田銃をかついで居るが整然とした兵式教練に豹変したが……。

学生と軍隊は犬と猿の間柄としか感じられない、そうした時代に学生が軍隊の馬、而も貴重な兵器に乗せてもらいたいというのだから難色のあるのは当然であろう。

当時の軍隊の言葉に兵は一銭五厘の葉書を出せば集るが、軍馬は高価で買入れ年月をかけて調教するのであるから貴重な兵器であると云われていた。

こんな状態の下では軍事研究という項目を旗じるしにしなければ許可されるはずがない。

軍事研究という1項の中で夏休期間中に海軍の練習艦隊に乗せて貰って南洋群島を見学する企画もあったが、不幸にして事は不発に終わった。

騎兵第七聯隊に乗馬合宿中、旧聯連長中山騎兵中佐と新聯隊長、岡田中佐の更迭があり、命下附達式を乗馬会全員で見学することが出来た。

こうした状況の下で認下されたので、三十年誌に平山幹事長が記したように、乗馬会員は下士官待遇としてあつかわれた。

合宿中に教官の古城軍曹殿が営兵司令の時のこと、営門を出る時に、古城軍曹独特の敬礼をまねて敬礼をして、叱られた事も昔の思い出である。

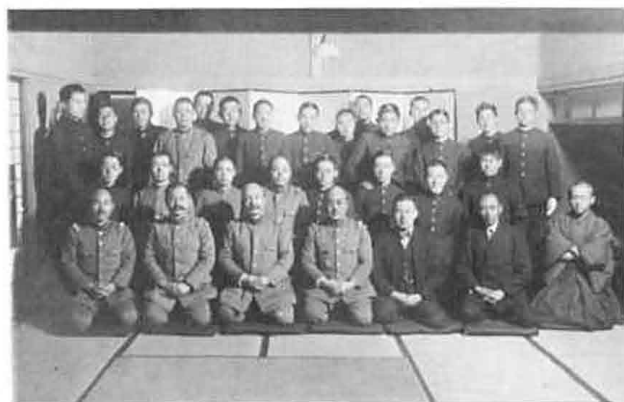
思い出せば45年も昔のこと、学生馬術界の名門、北大馬術部のOB会員に名を連ねて頂く事を榮譽として記憶をたどって拙文を敢えて致しました。

文武会馬術部

昭和5年～8年



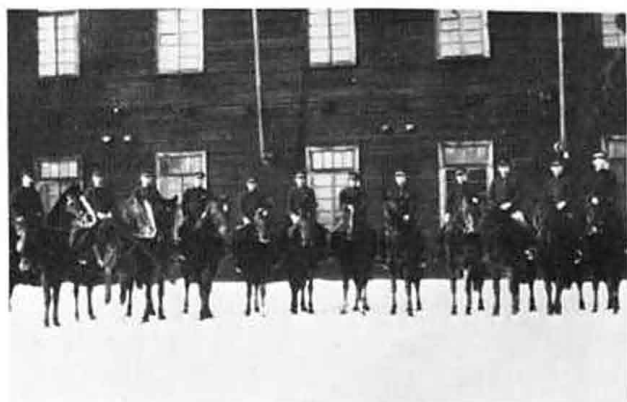
昭5・6月 新入生歓迎会



昭5・10月 例会



昭5・12月 合宿 於旭川騎兵聯隊



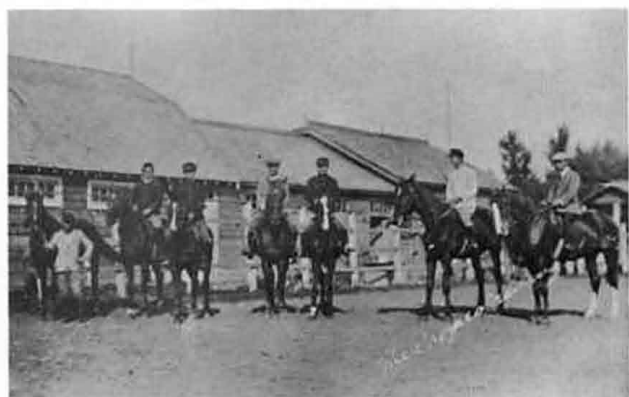
昭6・8月 營庭にて



昭6 北海道大会(東園氏) 於旭川



部員証



昭6 初夏 札幌愛馬会



昭7 東園氏、植村氏



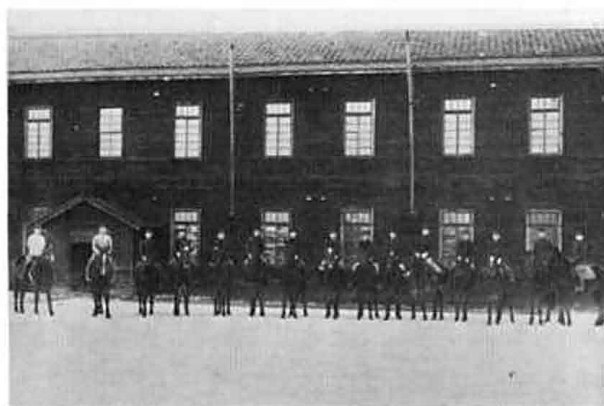
昭7 永松氏送別会 於大通いろは



昭8・10月 中島までの遠乗会



昭8・11月 北大・中学校総合演習



昭8 冬期合宿

昭和7年卒 永松四郎

私は成城学園より昭和4年4月北大農学部畜産1部の入学の許可を得て勇躍胸を脹らませ夢を持って札幌に行きました。それ迄仙台より以北に行った事がなく札幌には知人も同期生もなく只1人ポッチ実に心淋しい次第でしたが幸い乗馬をして居た関係上馬術部の歓迎会を学園の近くの肉屋でしていただき其の席上に故松本学兄他諸兄と知り合い就中故松本学兄とは爾来刎頸の交友をさせていただきお蔭で札幌の学生3年間の生活は青春を謳歌しました。

昭和5年3月頃旭川騎7にて馬術部の合宿訓練をして其時の聯隊副官をしておられた城戸少佐殿の御指導を受け一同は恵まれた環境の許で馬術の業の研鑽に一層努力しました。

合宿の際の逸話を一寸御披露いたします。

河崎学兄は蜘蛛が大きらいでしたので或日一寸彼を驚かしてやろうと思ひ私が彼に便所に沢山くもがいるよと伝えたら其処には行かず他の所を利用すると云う一寸想像もつかぬ半面が彼にあった。

私は昭和5年全日本学生馬術大会に代表として習志野騎兵学校同大会に出場し上位入賞をかくとくしたきおくがあります。

昭和6年には伊達君の入部により馬術部も一層充実しました。

昭和6年の師走の終る頃第1回東亜大学と対抗試合をしました。僅少の差にて負けました。其際伊達部員の大変なお世話になり学生としてはぜいたくな超一流の旅館針久に宿泊しました。

半沢学兄が部長となられ其間種々の御苦勞をされ馬術部の為にお尽しになった事をこの紙片を利用して厚くお礼申します。

半 沢 君 と の 半 世 紀

昭和 8 年 卒 武 田 朝 男

北大馬術部の功勞者、名部長だった半沢道郎君と私との交友は、そろそろ半世紀になろうとする。

昭和 2 年北大予科に入学したとき、半沢君も同じ農類に地元札幌 1. 中から入って来た。私は郷里が仙台藩内だったので、半沢君の父君、ナットウ博士、洵先生が建てられた仙台学寮に入れて貰ったから、半沢君との交友は同学の誰とよりも早く札幌到着と同時に初まったと云ってもよい。それからの話はいろいろと思い出せば限りないが、同君とは毎年の学会への上京の機会や、近くを通るなどのときは必ずといってよい位、会って来たから、お互いに、久しぶりに会ってみたら大変老けていたなどと思うことなしに今日に及んだ。尤もかつて全く下戸だった同君が、十余年前から腕を上げ、年と共に酒豪の域に至らんとするの概をみると、その変化の甚大なるに驚嘆を禁じ得ない面もあるにはあるが。

私が北大乗馬会に入ったのは、入学間もない頃、同級の九鬼（誠之助）君と一諸に、たしか半沢君のさそいで当時のキャプテン中野（友二郎）さんにたのんで入会を許して貰ったからである。中野さんは当時桑園の方の西 1 5、6 丁目あたりに下宿していて、毎夜のように入会者を自室に呼びよせては、乗馬スピリットを吹き込むのに余念がなかった。曰く「学問は自然にできるが、馬は努力しなくては達成できない」「馬を措いて津軽を越えて来た意味はない」「死ぬなら馬と死ぬ」等々であった。その雰囲気は時々ゆるめて呉れたのが岩垣先輩である。軽妙なワイ談をはさんで馬との親しみ方などを教えてくれた。それで同氏は、以来今日までワイ垣さんで通っている。そのワイ談が初まると純な半沢君は（私も）視線のおき場に困ったり、顔を赤らめたりしたが、九鬼君は下品な話はイヤだと顔を硬直させたりしたものである。

乗馬練習は、先輩が開いてくれた月寒連隊での週 2 回（土、日）が基本で、その日には 1 5 - 2 0 名がゾロゾロ同連隊に通った。雪の朝など豊平までの電車が止るから徒歩より外なかったが、私は半沢君と宿舎が近かったから、2 人は常に一諸に歩いたものである。雪中行軍は東北の山村生れの私の方が上だったが、馬の乗り方はいつも半沢君にかなわなかった。豊平から月寒までの馬轡は忘れ難い。北海道ならではの味わいであった。

その頃、時代はよし、友もよし、乗馬も少しずつ進歩してくるにつれ、馬を自分から離して考えることは到底できないという状態に段々と深まって行っただった。

私の馬に対する態度は科学的、技術的なところがぼけて情緒的の方が強かったように思う。馬の夢をよく見た。椅子に逆に腰かけて脚をぐめて快感する。誰彼なしの乗馬姿のプロマイドをあさる。雑誌の切り抜きに凝る等々。だからいつまで経っても馬術の域に近づくことがなかったわけである。後から入会、入部してくる連中に次々と追い越されるし、競技会に出ても、落馬失点を大きく稼ぐといった具

合で、情けない思いを独りで随分したものである。それでも卒業してまで馬は忘れられず、たとえ貧馬の1頭でも持つまではと、親からの結婚話を断りつづけた仕草は47年度部報で時効告白した次第である。

昭和6年、九鬼君がキャプテンになったとき半沢君が会計を、私が庶務を担当した。

その頃学習院から、私にとっては藩祖伊達公の後嫡、伊達宗文君が北大に入り、同じ仙台学寮で暮らすことになった。この人が現東京O・B会長の東園基文君その人である。彼の生れのよさ、人間の優しさ、心の深さ、そして馬に対する端然たる態度等々、私は随分と学ばされたことを沁々と思う。同君はこの年の東北乗馬大会で個人優勝するし、全国学生馬術選手権大会で優勝したりで、北大馬術部黄金時代は、この頃その花の咲き初めを見たのである。

私より1年後れて入会した本田(桓康)、小笠原(義頭)の両君や、昭和4年に成城から農学部に入って来た永松(四郎)君も亦大いに活躍した。3君共に現在東京O・B会で重要な存在をなしている。

前記伊達君が発想した馬術部のモノグラム制度がきまり、同君の図案した記章が、昭和7年に初めて授与されたが、半沢君はたしか第11号で、私は第12号である。私は今もなお、子供のようにこのモノグラムを佩用するのが嬉しく、現役諸君が東京馬事公苑に来たときとか、東京O・Bの会合のときなどに、昔の陸大卒のテンポーセンのように、上衣につけて歩いてはよろこんでいる。

モノグラム以後40余年、半沢君と交ってこの方約半世紀。はるけくも歩み来しものかな。さてお互い、これから幾歳程の歩みがあるだろう。

(1 9 7 4 . 2 . 2 3)

「半沢道郎さん」

東園基文

この文を読まれる大部分の方は、半沢道郎さんのことを親しみをこめて部長と呼び、先生と尊び敬っておられることゝ思います。私にとっても、先輩として心から敬愛しているお方ではありますが、私が半沢先生とお呼びすると、どうしても、あの細菌学の権威であり、人も知る納豆菌の発見者である、半沢洵先生のことになってしまうのです。私は大学の8年間を半沢先生が創立され、寮長をしておられた、北7条西12丁目の仙台学寮にご厄介になりました。私が初めて札幌に来て、馬術部に入れて頂いた頃道郎さんは理学部の2年生、次弟の啓二さんが予科の3年生、そして末弟の宏さんは可愛い小学生でした。今ではお3人とも博士ですから先生とお呼びするのに吝ではありませんが、1昨年9月までお父さまの洵先生がお元気でしたので、お子さん方は皆「さん」付けて呼ばして頂くことにして、話をすゝめることにします。

昭和の初期の馬術部は皆さんご承知のように文武会馬術部になったばかりのいわば揺籃期、部に馬がいる訳ではなし、部屋があるではなし、練習といえば月寒の歩兵第25連隊と、夏冬の旭川騎兵第7連隊での合宿練習ぐらいのもの、馬はなくともよく集り、よく語りました。語るといっても馬術の話だけではありません。生き物に縁のある部だからではもないでしょうが、ついつい話が下るのです。結局はみんなが好きだったんでしょね。またよく飲みにも行きました。そうした中であって道郎さんだけは違いました。お父さまのいゝつけ通り勉強され、真面目人間が鑑と仰ぐようなお方でした。われわれは、道郎さんはお酒は飲まない、いや飲めないお方と信じこんでいました。それだから強いて飲み連れ出す先輩もなし、私とてお誘いするなど考えもしませんでした。

お父さまの洵先生も実に真面目な立派な学者さんであり、優れた教育者でもあられました。お母さまの美加さまは実に温かみのある賢婦人でした。このお2人の間に生まれ、そしてはぐくまれた道郎さんが真面目な学徒であってなんの不思議がありません。

そこにゆくと私などは、どちらかといえば勉強よりは馬の方に熱心でした。いや正直にいつてしまえば勉強をなおざりにして馬に入れ上げたものですから、洵先生によく、「学生は勉強するのですね」と諭されました。試験のときなど、「英気を養って来る」といって街に出掛けると、「試験中ぐらい街に行かずに勉強するのですね」と叱られたものです。お蔭で同級生と一諸に卒業し、馬術部とも札幌ともお別れをしました。

それからというもの道郎さんとお会いすることもないまゝに大東亜戦争となり、敗戦の苦しみのうちに月日はたちました。その内に札幌に行った人の便りに、道郎さんは元気だけれど、随分変わった、との情報。そして久々に上京された道郎さんの聞きしに勝る天晴れな変身振りには、先輩も同級生も後輩も等しく仰天、みんなでその美事さを喜び合いました。それも道理、昔のまゝの道郎さんだった

ら、上京されたとの知らせにお久し振りと集る面々しるこ屋であんみつのお替りでは、どうしても気分が出ません。それがどうでしょう、お酒はおいしそうに飲まれるワ、若いホステスと楽しげに調子よく話されるワ、なんと変れば変るもの、われわれの方が浦島太郎みたいにあっけにとられるばかり。それからというもの、ひとたび道郎さんご上京の報伝わるや、雪印乳業の重役吉見一郎君の連絡で当時の部員に召集令状が下るならわし。

われわれが道郎さんとお別れしてからの長い間に世の中すっかり変わったとはいえ、何が彼をそうさせたか、何時から彼はそうなったか、私は寡聞にしてそれを知らない。只いえることは、それはわれわれというよい友と別れて後の出来事ということだけ。もし彼をそうさせた人がいるなら、そしてそれが女性であるならなおのこと、東京OB会の道郎さんと共に在部した連中でそのお方を表彰したいもの。どうかご本人は名乗り出て下さい。

私には、道郎さんがこんなにも長い間実に熱心に部のために尽して下さったのも、この変心あつてのことに思えるのです。その意味ではわれわれ在部時代にそれをなし得なかつた者は道郎さんにとって悪友かもしれません。

その悪友どもが道郎さんの次のご上京を首を長くしてお待ちしていることをどうぞお忘れなく。

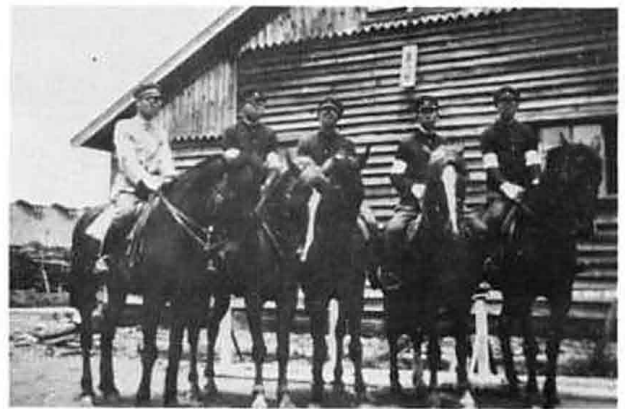
昭和9年
—
11年



昭 9 春 期 合 宿



昭 9 ・ 3 月 合 宿 於 旭 川



昭 9 ・ 6 月 3 日 北 海 道 予 選 会 に て
於 旭 川 騎 兵 第 七 聯 隊



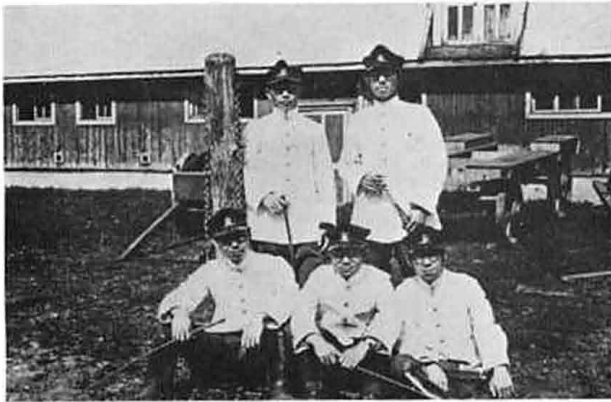
昭 9 合 宿 於 旭 川 騎 兵 第 七 連 隊



昭10・1月26日 予科修了記念



昭10・1月27日 送別会



昭10・5月 東北大会の練習に際して



昭10・6月 於旭川騎七



昭10・12年29日 合宿 於旭川騎七



昭10・12月 合宿 於旭川騎七



昭11 春期合宿



昭11・4月 学内大会



昭11・5月 学生選手権道予選合宿の際 於旭川



昭11・6月 全日本高等学校馬術大会



昭11・6月 東北乗馬大会出場者



昭11・9月 東北大定期戦



昭11・12月 冬期合宿 於旭川

思 い 出 す ま ま

昭和10年卒 本 田 桓 康

何しろ四昔も前の事なので記憶も薄れてしまったが思い出すまゝにインターハイ初出場の事等つゞらせていただきます。

東京の中学在学中の或る夏休みを札幌に嫁いだ姉の家に過ごし今は亡き義兄に伴われて道内各地を旅した事があったが、中でも最も印象深く脳裡に刻み込まれたのが緑の芝生とエルムの大木に囲れた白亜の校舎の北大とのびのびと遊ぶ牛馬の群の牧場風景であった。そんな思い出から何時の間にか高等学校は北大予科ときめ込んで昭和4年北大予科に入学する事になった。丁度その頃義兄が苫小牧の郊外錦多峯（現在錦丘）に牧場の経営を始め、札幌にも自馬を乗馬倶楽部に依託して居たので騎乗の機会にめぐまれ入部前から大学の先輩とも顔なじみであったので自然入部する事になった。

予科1年の間は只がむしゃら乗りまくり、月寒の聯隊での土曜、日曜の練習の外、殆んど毎日当時南7条西21丁目にあった札幌愛馬会（会長、三瓶氏、教官、武田忠孝氏）にかよい続けていたが、馬術と云う様な高尚なものではなく、只馬に乗る事が楽しみであった。丁度私共が予科に入学した同じ年成城高校から永松四郎先輩が農学部へ入学された。永松先輩は既に成城高校時代学生乗馬界に於て有名を馳せて居られその洗練された技術と容姿での乗馬姿は我々を多いに刺激し、それ迄殆んど思いも及ばなかった中央の競技会への出場の機運をふき込み色々指導していたとく事になり、翌昭和5年北大馬術部の誕生に当り初めてインターハイ出場実現を決意するに至った。之迄旭川全道大会（後年旭川騎七に騎兵学校教官、オリンピック選手の城戸少佐殿が又白糠軍馬補充部に遊佐中佐殿が着任されてからは、中央に劣らぬ盛大な競技会になった）位にしか出場の経験のない我々にとっては、東京での晴がましい大会出場には大分おじけを感じていた。岩橋帰一君（卒業後病を得て急逝された）を主将として私共4人青山の陸軍大学校庭に初めて足を踏み入れた時も何か威圧を感じ身のすくむ思いだったが、物慣れた永松先輩により教官や他校選手に引き合わされようやく落付を取りもどすことが出来た。当時自馬を持った高等学校としては、学習院、成城があり、両校選手達の物慣れた態度容姿に引きかえ破れかけた白線帽に軟胴の長靴姿は対象的であり蝦夷地の学生は熊にでも乗って練習し

ているのではないか（坂田の金時なみ）等との影口さえかわされていたとの事であった。競技は障害飛越が主体で時間減点が加味されたものと記憶しているが幸い出場の4人共無減点で通過、学習院も亦無減点の上奔馬を良く制禦したとの事で増点があり同校の優勝が決定され北大予科は残念ながら2位に止る事になった。初出場としては予期以上の成績と先輩諸兄にもなぐさめられ大いに感激したことであった。

翌昭和5年には前年学習院の主将だった伊達（現東園）先輩も北大農学部へ入学され永松先輩共々我々を指導していたのでインターハイ出場に当たっても好敵手学習院、成城両校選手とも親しく交流する事も出来前年に較べ軽い気持で出場出来たが、4位の成績に止り甚だ残念なことであった。

予科3年間の部生活の中で一番思い出されるのは、年間幾度かの旭川騎兵七聯隊の合宿訓練であった。下士官並の待遇を受け午前、午後の強行訓練の一週間は苦しい中にも楽しいものであったが、終わってから後の旭川の町での慰労会も合宿生活にかゝせぬ楽しみであった。

インターハイ等馬術大会を前にしての強化練習を私ば何時も義兄の牧場で楽しんだ。朝もやをついで牧夫達と共に行く若駒との合せ馬、放牧場の見巡りに牧柵を飛び越へて山野を走り巡る荒地騎乗、そして時には飛びそこねて落馬したり、牧柵をこわした事も今は楽しい思い出になっている。

大学2年以降事情あって一応退部はしたが、乗馬は引続き楽しんでいたが、その外冬は馬にスキーを引かせ春から秋にかけては、軽駕（トリチング）を引かせ牧場周辺の山野を馳けめぐり、又乗馬2頭を再調教して、ハクニ一種の1頭は速歩馬に、サラブレッドの1頭は馳け馬に仕込んで苫小牧の草競馬に優勝させた事も楽しい思い出の一つになっている。

馬 術 入 門 の 動 機

昭和11年卒 吉 見 一 郎

僕が馬術部に入ったのは予科入学式当日各部から勧誘に来るアレに応じてと言う訳ではない。当時馬術など考えても居なかった、中学時代長距離を走って居たのでどうしても何所かに入らなければならぬのなら陸上競技部だ、と考えていた。入学と同時に恵奘寮に入寮した。当時は今の理学部の前の獣医学部の所に新北中南の四棟があって寮生は殆んど、どの部かに属していた。僕は南寮に入れられたが2階は柔道部の猛者達中で髪は今の長髪族など及びもつかぬものであった。南寮の1階は所謂無所属の連中で此所に入れられた。寮では毎年秋に定山溪で全寮コンパが行われ同時にクロスカントリーレースが催された、僕はこれに参加して見た。最初の5斤位は30人中の中位を走っていた、藤の沢簾舞とすぎる中に相手の方がどんどんおくれて行き先頭の5人のグループに入っていた。15斤を走った時には前方には只1人であった。長距離選手の千田氏である。当時は鉄道が敷かれていたからこの側の小途を走るのは坂は少く直線的で都合がよかった。彼はチョイチョイしろを振返ってカー

ブにかゝると歩いたりしていたが僕の姿が見えると又走り出すのであった。定山溪までの約30軒を完走して2位に入賞した。それからはたびたび陸上部のキャプテン奥田享氏（現札幌社会保険中央病院長）のしつような入部勧誘をうけてまいった。

にもかかわらず馬術部に入ったのとは言えば脇田代子郎君の強引なすすめによるものだった。彼は岐阜から北海道をあこがれてやって来たのだが昼飯後は毎日基礎医学の横の芝生にねそべって駄弁った。其所は丁度工学部の方からの小川が流れて来る南向の暖い所であった。当時の北大構内は正に都ぞ弥生の歌詩其の物で、水芭蕉から始まる春夏秋冬は若人のロマンをかき立てずには居なかった。彼は其所でどう言う訳かしきりに馬術部入部をといて遂に僕を引入れてしまったのだ。当時は武内、東園、植村、本田、小笠原、高杉、脇田、滋賀、森山、大迫といったキラ星が揃っていて月寒の二十五聯隊に通い冬休みは旭川の騎兵七聯隊で合宿が行われた。旭川での猛訓練は気持がよかった。最初からあぶみなしで障碍をやらされ軽速歩さえそれで平気にやれるようになった。卒業以来既に38年、現在は何のめぐり合せか牛関係の仕事をしている。然しどう見ても牛には馬ほどのかしこさ俊敏さ人なっこさ体型の美しさは見られない。馬は絵にもストーリーにもなるが牛にはそれはない。通勤途上馬事公苑の近くでよく騎馬巡査や農大馬術部の人達を見受けるがいまだに車中から振返ってあかずながめている。札幌を訪れる時は稀に馬場によって見るが現在の馬術部の人達は馬の管理飼育及び費用の念出までやらねばならぬのだから本当に大変だ。夫れに良い馬にめぐまれない。管理飼育は人まかせの軍馬利用時代とは比較にならぬ悪条件だ、心から敬意を表す次第である。僕は年に4、5回海外へ行くがヨーロッパでは必ず公園内に騎馬専用の途があって老若男女が楽しんでいる。又オーストラリア、ニュージーランドは元来酪農の国だが農家には必ず2、3頭の馬を飼っている。牧羊のためよりは娘さん用の乗馬を楽しむためだ。競馬もさかんで馬主は一家をあげて弁当持参で厩舎に集って来る。去年クライストチーチに行った時招待をうけた。レジャーだからノータイ、ノー上着で行った処ロヨヤルシートに案内され先方は蝶ネクタイ、シルクハット、婦人は長裾の盛装で遠来の日本人に敬意と祝意を表してスコッチの乾盃をしきりにうけたりバツが悪かったがギャンブルより社交を楽しんでいるのだ。この年は日本のバイヤーが馬鹿高値で種馬をセリ落して現地人の羨望とヒンシュクをかっていた。

然しスポーツでつき会った連中はフェアシップを心得ているから嫌味がなくてよい。男のつき合いはそうあるべきだ。東京のOB会はよく集まる。僕が関係しているレストランを利用して下さるのも有難いことだ。来る3月8日には48年度の総会が予定されている。久々に皆様と会えるのが楽しみだ。

半沢先生の御功績には一言もふれなかったがこれはもう皆さん充分書かれる事だろう。ただ長年の御尽力を心から感謝申し上げ今後の御健康を祈上げます。最後に部のますますの隆盛を期待して筆を擱く次第です。

思 い 出

昭 1 2 年 卒 滋 賀 秀 明

昔は学生だけが参加して開かれた対抗馬術競技会のほかに、軍人や一般の乗馬団体も参加した乗馬大会というのがありました。今は競技馬は多いかも知れませんが乗馬用の馬は少いし、騎兵隊もありませんので、昔のような乗馬大会を再現することはとても不可能なことだと思います。以下はそんな古きよき時代の楽しい乗馬大会の思い出をつづったものです。

その乗馬大会とは主催はいろいろでしたが、騎砲兵隊と学生馬術連盟、一般乗馬団体が参加して開催されたもので、私が見たり、参加したりしたのは習志野、仙台、旭川の乗馬大会ですが、馬術競技が半分、ショーが半分とでも云いましょうか、観客も多く、お祭り騒ぎとまではいきませんが賑やかで楽しい大会でした。

習志野の大会は流石に全国的規模で、全国の騎兵隊から選ばれた精鋭の対抗競技、特に一騎或は二騎並列の連続高障碍飛越などは胸のすく思いで観覧したものでした。又学生もこの大会に出場出来るのは全国各地から1名乃至数名のえりぬきの選手ばかりで見答えのある競技を展開したものでした。その他に模範馬術がありまして、特に印象に残っているのは昭和何年でしたか、北大からは東園、本田先輩等が出場された年だと思いますが、ロスアンゼルスオリンピックで優勝された西中尉がウラヌス号に乗って障碍飛越のデモンストレーションを行った姿です。名馬ウラヌス号の堂々たる体躯と、それにうちまたがった容姿端正な西中尉の姿、余りスピードもかけずに見上げるような高い障碍を次々に易々と飛越した様子がつい昨日のことのよう目に浮びます。

習志野の乗馬大会は軍人と学生が半々と云うより、むしろ軍人の競技が主役でしたが仙台と旭川の大会は軍人の競技や供覧馬術もありましたが、学生の出番が多かったように記憶しています。

昭和11年に仙台宮城野練兵場で行われた東北乗馬大会は、私の学生生活最後の年でもありましたので、40年近くたった今でもよく覚えております。仙台の大会には習志野の大会とちがって、関東、東北、北海道の大学、高専の学生チームがたくさん参加しました。この大会では北大は本科軍は余り振いませんでしたが、予科軍は高専対抗で優秀な成績をおさめた筈です。この大会の時、我々が仙台で泊った旅館の親戚というカナダ帰りの日本語のできない二世で、きれいな娘さんが応援に来てくれたのを同行の選手諸君は覚えているだろうか。その娘さんを中心に松平君、石井君その他と一緒に写した写真がある筈です。恐らくアルバムにはのらないと思うが残念です。

旭川の乗馬大会は軍人、学生の他に、札幌その他道内の民間乗馬団体よりの選手の参加があり、地方色豊かな大会でした。我々は地元ではあり、学生、OBと多勢で押しかけましたし、学生の参加といっても北大と盛岡高農位しかありませんでしたので余り対抗意識をもやすこともなく、云うなれば村の小学校の運動会なみの気易く楽しい大会でした。

私は旭川の大会には何回か参加しましたが、はっきり記憶に残っているのは矢張り昭和11年の大会です。この年には東京から騎道少年団というのが来道してショーをやりました。旧制の中学生位の

年令の若者百余名が紺の制服に身をかため、各自旗を持って行った乗馬の集団演技は中々見事でした。又この大会には我等が先輩お馴染の店モンパリが出張して、天幕張りの休憩所を設け、アイスクリームなどを売っていました。丁度この日は気温が35度位に上昇した暑い日でしたので度々アイスクリームの世話になりましたが、その休憩所の前で半沢先生やその他の方々と一緒に写した写真は私は持っています。これを見る度に、競技とは別に昔の乗馬大会の楽しい雰囲気が出ていますので、当時を懐しく思い出します。そんな写真も今回のアルバムに載るのだろうか。

以上特に印象の深い乗馬大会の思い出を書いたものですが、競技会のほかにも新入部員当時しぼられた月寒二十五連隊の練習、苦しかった旭川の冬期合宿も今は楽しい思い出。そんな写真も集って今回のアルバムに載るとすれば、どんなに懐かしいことだろう。アルバムの完成が楽しみです。

昭和12年～14年



昭12・1月24日 送別会



昭12 春期合宿



昭12・5月 練習後月寒街道を帰る



昭12・5月23日 選手権予戦 於旭川



昭12・8月 帝大馬術大会優勝



帝大馬術大会



昭12・9月25日 遠乗を終えて



昭12・8月 西村氏



昭13 送別会



昭13 対弘前高戦 於札幌



昭13 アルバイト



昭13 遠乗会



昭13 遠乗会



昭14 送別会



昭14 馬を洗う



昭14 対東北戦 於旭川



昭14・7月 北海道乗馬大会



昭14・8月6日 インターハイ優勝



昭14・9月 管間氏学生選手権優勝



昭14・9月 インターハイ優勝



昭14 春 旭川合宿

昭17年卒 福 光 幸 彦

日頃すっかり御無沙汰している馬術部ですが、半沢先生御退官記念出版と云うことで、何かひと言と思ひましてペンを取りました。

昨秋先生の退官祝賀会で久振りにお会いし白髪はふえられたものゝ、昔変らぬ御元気な姿に接し心強く思った次第です。今更乍ら光陰の速さに驚きます。先生に御世話になってから数えて見ると40年以上にもなります。昭和8年に私が親のあとを継いで百姓になろうと農学畜科に入学した時最初にお目にかゝったのが御父君の故洵先生でした。当時の主任教授だったわけです。そして理学部には道郎先生がおられました。従って半沢父子2代の御世話になったと云うことになります。

幼い頃から憧れであった乗馬を覚えたいと思い馬術部に入れて頂きましたが、標茶の農場で落馬して左肩関節を脱臼し、又余り頑健でなかったので日常の猛練習には耐えられなく、マイペースの練習で上達はしませんでした。当時第1農場の厩舎には10頭近くの馬が居り中でも宮武と云う青毛は乗り易く又障害もよく飛んでくれた大好きな馬でした。毎年夏休み旭川騎兵隊での合宿練習も忘れられないものです。厳しい軍律下にあつて、朝昼夕と毎日3頭の軍馬を扱ったこともあり、障害飛越、馬場馬術、野外騎乗と今考えて見ると物凄いのトレーニングでよく耐えられたと思います。騎座の皮膚は赤くむけ、はれあがつて痛むが、不思議と鞍に跨ると痛みを忘れると云う毎日でした。屋内馬場で将校馬により1米30の棒障害に向うとき受ける威圧感と胸のときめき、無事飛越後の爽快感、屋外馬場のそれとは異なる表現しようのない感触がありました。練兵場で駈足行進中、ヒッカケられて押えきれず、当時の旭川護国神社の手前で遂に落馬、馬は砂けむりの中に消えました。腰を打って足をひきずり乍ら隊にたどりつくと、馬はチャンと馬房に帰っており安心はしたものゝ、当番兵にしたゝか焼を入れられたのも懐しい思い出です。昭和14年野砲第7連隊に1つ星で応召入隊、馬を相手の生活で農村や炭鉱出のむくつけき兵士に混ってどうにかやれたのも、馬術部で教わったたまものと思っています。幸か不幸か？僅か3週間程の後、軍医になってこいとの命令で除隊されました。

軍医としてある病院に勤務中、近くに憲兵隊の厩舎があり、その隊長と仲よくなって度々馬上の人となりました。数年間の乗馬空白のあとでしたが結構楽しむことが出来ました。

戦後の混乱もやゝ落ち着きを見せて来た昭和27、8年頃でしたか、半沢先生から乗馬会をやるから出てこいとお誘いを受け久々振りに手綱をとりました。現役、OBの障害飛越対抗競技で、5人チームであつたところ、OBは1人足りない(太秦先生、故松本先生、半沢先生であつたかと思いますが)ので、お前1番若いのだから2度乗れ、と云うことで、2度目に第1農場馬場のエルムの木蔭にあつた赤練瓦障害で拒否されてとうとう落馬、乗り直したものゝ、心臓は早鐘を打つが如く、騎座は全くガクガク、次の障害はすべて素通りで辛うじてゴールインしたことがあります。その後も度々半沢先

生からお誘いを受けましたが雑事多忙で疎遠になっていましたところ、昨年秋、乗馬会と云うのが出来たから入会する様にとの御案内を頂き、途端馬心がウズキ出し、女房に乗馬袴と長靴はどこにあるかとききましたところ、絶対に駄目ですと叱られ、まだ子供もすっかり片付かぬのに、この年になってケガでもしたらどうするのと、お説教のおまけもつき、あっさり引きさがつた次第です。いろいろな事情で馬術に青春を打込むまでにはゆかなかったのは残念ですが、人と馬との触れ合いを体験したことは貴重な人生の収穫でありました。人馬1体と云いますがこれは乗った時だけのことではありません。飼育、管理、調教、騎乗を通じてのことでありましょうが、私の体験は1側面乍ら乗った時、そのあとの管理の中にありました。騎乗を終えて厩舎前で水を与え鞍を外し、御苦労だったと声をかけ乍ら藁束で4肢腱のマッサージを入念に行い、瓜の泥を除き水洗したあと、体の汗をふきとりブラッシュをかける、その時の強烈な馬臭は私にとっては香水にまさるものでありました。「青よ又会う日まで」と頬ずりして別れた顔、顔、顔、走馬灯の様に脳裏をよぎるのであります。(49年3月記)

想　　い　　出　　片　　々

昭15年卒　　西　　村　　雅　　吉

馬術部10年誌を作ったのは大学卒業の年でしたから、40年誌ということになると卒業後30数年を経たわけで、昔の写真に説明をつけよといわれても記憶がぼけているのも無理からぬことかも知れません。

当時は予科3年、本科3年ですから、新入生と先輩では5、6年も違っているわけで、新入生にとって本科の先輩は、とくに馬術部の先輩は毅然としており、立派であり、また、別世界の大人の感じでありました。予科1年のときの主任は本科2年の高杉さんでした。初めての騎兵第7聯隊の冬期合宿では、高杉主任がスキー部合宿と重なってどうのこうのと上層部では若干のやりとりがあつたらしいということも、新入部員の私共には、なんとなく、おぼろ気を感じとれる程度のことでした。予科

幹事の前川さんには「鑑外他」で泣く思いをさせられました。そのことから後年の柔和さはとても想像のつかぬものでした。昨年、前川先生を失ったことは本当に残念なことです。

2年のときは、インターハイに出場しましたが、成績は思うにまかせず、閉会式で貧血をおこす仕末でした。

3年では予科幹事として、部の運営の見習いを始めました。部としていろいろの行事も多く、幹事会も頻繁にあったように記憶しています。場所は森キャンこと、三越の近くにあった森永キャンデイストア1階奥の小部屋と大体決っていました。それには卒業後の先輩も顔をみせていたようで、部のことその他の勉強になりました。その頃になると旭川のカフェモンパリアが、騎7合宿、北海道乗馬大会などの折、先輩の根城であることも分るようになりました。

本科の3年になり、その年から新しく部長となられた理学部太秦先生の研究室へ卒論生として入ると同時に主任となりました。公文書的なことも大分書かされ、候文とは形式が決っているので便利なものであることを覚えたり、OB先輩とのコミュニケーションも主任の大事な仕事であることを知ったりして、それだけ先輩諸兄に助けられました。

昭和14年度は、御承知のように、インターハイ優勝、菅間君の選手権大会優勝など、カップが机上、文字通り所狭しと並んだ年で、私にとっても幸運な主任の年でした。

在部を通じて乗馬の思い出として1番残るものは、騎兵聯隊での合宿練習です。多いときには1日に3回の練習でしたし、将校自慢の愛馬を貸してくれたの思いもかけぬ高障害を飛んだときは、これが醍醐味かと感じたものでした。また、後軀集合や、手拭とりなどができる集団訓練のできた馬に乗る機会には他では得られないものでした。

昭和15年
—
17年



昭15・3月 送別会



昭15・5月 全日本学生予戦



昭15・7月 帝大戦 於京都



昭15・9月22日 第7回札幌乗馬大会
小林誠平氏



昭15 高江教官を送る 於月寒官舎



昭16・1月送別会



昭16・3月合宿



昭16・5月合宿



昭16・5月合宿



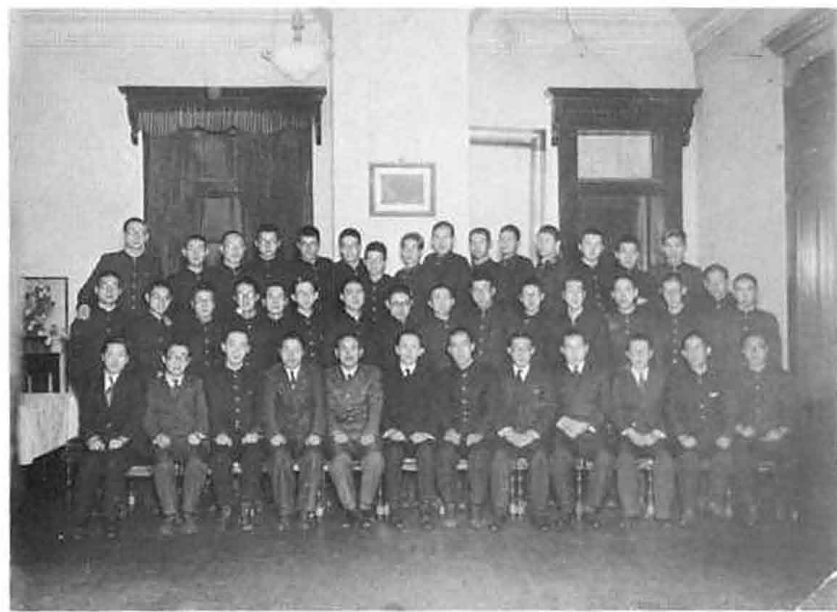
昭16・5月合宿



昭16 對抗試合



昭16・12月



昭16年 卒業式



第一農場



対二高鞍



昭17 夏 新入生歓迎会



昭17・8月 インターハイ
出場メンバー



昭17・8 夏の旭川合宿



昭17・8月 全日本学生選手権

乗 馬 新 川 号

(昭16.畜2)石井和彦

気品ある顔貌 均整のとれた体形
そして軽やかな足どり それが
駿馬とたたえられる君
それに対してオレは………
頸は太く 肢は短かい
ずんぐりした体格
多分ペル雑のオレを
羨やむものはいない
内に秘めた能力など
誰も知らない
そのオレが一生懸命に走った
減点5点で優勝した
騎手の学生が
オレの頸をたたいて礼をいった
オレにとって ほんとうは
勝ち負けなど どうでもいいことだ
だがオレは満足した その学生が
オレの憂愁を
オレが馬である宿命を
感じとってくれたときに

昭和17年卒 岡田光夫

私の部生活は昭和12年から昭和17年の5年間で繰上げ卒業の2回目で6ヶ月早く社会に出され

たと云うより軍隊に入れられましたので、先輩諸氏の様に予科3年本科3年と云うコースではありません。予科に入りました時未だ正式に当時の桜星会の部として認められていなかった馬術部の新入生勧誘の机は廊下の1番外れに置かれていたため途中で剣道部に引っかかり遂に強引に入部の書類に名を書かされ8月頃まで剣道部におりましたが1学期をすごした7月に強引に退部し馬術部に入りました。退部した時の剣道部の主将は今札幌の高速電車を作っている本間部長で同じ市に奉職をして居りますし又馬術部には半沢先生の弟さんの半沢宏教授が居られ積極的に私に馬術部に入部を進められましたのも今思えば何か因縁めいた感じがしてなりません。小さい時から馬に乗っていた為もあるが1年生から試合に出され対弘前高校戦の時にどしゃぶりの中をもとの北大の馬場で試合をし、遠来の弘前高校に花を持たせるために人馬転倒に落馬を取られ、(昔の審判はのどかなものでした)負けたくやささ、そして2年の時弘前に遠征して仇討をした事、桜星会馬術部として認められるためには当時のインターハイで優勝しなければならないと頑張り橋本、小林(共に戦死)山根(鳥取大教授)平井(東京OB)の4名と遂に全国制覇をやりとげた思い出等、いろいろの事が思い出されます。しかし戦時色が濃くなるにつれ月寒の練習もとぎれがちになった時にあらゆる便宜を計って下さり、又終戦後馬術部後援会員になって下さった染谷隊長も昨年83才の高令で亡くなられ、市の立場と馬術部後援会の立場で告别式に参列させて戴き御冥福を御祈り申し上げて来ましたが、我馬術部はこの様に馬を愛する学内、学外の方々の暖い後援の下に、更には献身的に御努力戴いた半沢先生の御苦心(馬術部の自馬繁養以来の苦しい台所への御援助、新馬場実現の御苦勞)の中に今日ある事を部員諸君に改めて認識して戴きたいと思ひます。

この度、大変ご立派な企画をお樹てになられた由承り、心から嬉しく存じます。岡田委員長はじめ皆様のいつもながらのご努力に敬意を表する次第です。

私ごときは寄稿の資格もないのですがうめ草のつもりで30数年前の思出を綴らせて頂きます。

大学予科時代 なつかしい文字です に私は入部させてもらいました。今は故人となった中野百太郎なる私の叔父が当時月寒聯隊の陸軍小尉でありましたが、馬術部の活動を見聞してこれこそいくじなしの甥に最適と思つたらしく、これが私の入部の動機となりました。中学時代は殆んど運動も出来ず、馬には触れることもなかった私故、全く自信もなかったのですが、岡田さんを初め多くの立派な先輩のご指導、同僚皆様や、失礼ながらお名前を忘れてましたが教官のご援護によりどうか低障碍飛越が出来る所まで到達致しました。しかしいよいよ本格的な訓練に入る頃に健康等の都合で余儀なく退部しなければならなくなったことを今でも心残りに思っております。

その間の懐しい想出は、5年半の札幌生活の中で最も鮮明なものがございます。その2、3をあげさせて頂くなら……………。

落馬その1。「はやあし、歩度を伸ばせー」、「あぶみをはずせー」、次の号令は「あぶみをあげー」。もう脚の感覚はない。これまで。ポロリと雪の上。馬だけが泰然自若と走り続ける。そのうらめしいこと。

落馬その2。私よりずっとベテランの某氏(農学部福岡氏?)が珍しく「膠着」になやむ。「安部君すまんが先に出してくれ」と。小生得意になって発進せんとしたその時、大地は一瞬にして転覆していた。帽子と眼鏡は拾ったものゝ馬の姿はない。今の言葉で言うなら「一体、どうなってんの?」。いち早く救援に来られた岡田先輩の指さす方を見れば、営庭の遙かかなたから兵隊さんに引かれてわが愛馬がやって来るではありませんか。その日のわが愛馬は狂奔の名人だったのである。

落馬その3。障碍飛越の日。わが愛馬は旭山、跳躍力抜群。普通駈歩のところを速歩で十分なのである。押えながら発進、新任教官は速度不十分と見られたのであろうか、踏切の瞬間自らの長靴に強鞭一振。あわれなるかな、私は愛馬の頭上を越して自ら横木を越えさせられたのである。(愛馬の顔を見るのが何んと照れくさかったことか)

この様な強烈な落馬に1度の怪我もなくさらになんの恐怖心も残さなかったのは諸先輩が馬術の心と技をみっちり仕込んで下さったからであろうと感謝している次第です。

私は未熟者でありましたから、晴の競技会は経験しておりませんが、例えば定山溪への遠乗、旭川騎兵聯隊の合宿などすばらしい楽しみと無上の体験の連続でした。定山溪行は寒い季節でした。林間に寒月を仰ぎながら不審音、馬も人も梢も深い海の底に佇む。北海道の自然は今もそのまゝでしょうか。

旭川合宿では2頭を受持たせて頂きました。その1頭は調教半ばの若駒でありました。上空の竹トンボの爆音に跳びはねる様な坊やでした。私が騎乗したあとは、へボな乗り手の悪影響を矯正するために騎兵殿が私の倍の時間をかけて再調教していることを知って誠に申し訳ない思いでした。大東亜戦争も大分進展した頃でしたが、私達は社会に於てずい分大切に扱われていたことと思い、今にして恥しくなる次第です。

合宿最後の日は軍旗祭。鍛え上げ磨き抜かれた数10、数百頭のパレードは「壮麗」の1語に尽きると言うべく、夕日に映えた躍動美は今なおさまざまと眼底に浮かびます。軍国時代を謳歌するわけではありませんがもはや再び見ることが出来ないのが残念です。これは55才男のノスタルジアでありましょうか。

末筆ながら皆様のご健闘を祈ります。

旭川合宿のメモリアル

昭20年卒 小林正英

3年程前、人間ドックに入った機会に、もう宿病のようになっていた腰椎部の痛みを調べてもらったところ、古い第2腰椎骨折ということで、「大したことはないが、これ以上痛むようだったら、外来の整形でコルセットをつけましょう。」ということです。

それまで、莫然と原因があれかなあと思っていたものがはっきりしたのです。それは予科1年（昭和16年正月）冬の旭川の騎兵聯隊での合宿だったと思います。

やっと馬に慣れたところですが、まだ体の重心も不安定、騎坐もしつかりしないところです。鏡をとり去り、首に手綱を結んで、覆馬場を周りながら障碍の飛越でしたが、「馬はどんな馬でも飛ぶ能力はもっている。それを逆に手綱を引張って妨害しているし、体も馬の飛越についていけない」ということで、上級生が長い調馬索で障碍の前きた馬をピンッと追うと馬は軽く飛越します。馬上ではコボレ落ちないようにタテガミをつかんだりして必死です。

1、2周して又ピンッと鞭が鳴り、馬は大部前で踏切りました。そして後軀の跳ね上るのにあおられてアッという間に空中に飛び出され、仰むけにくの字に馬場に落下し、グッとうなって動けなくなってしまいました。それからようやく痛みをこらえて起き上がりましたが、もう練兵休です。

その後多少の痛みはあったものの、重い打身程度と考え、若かったためかいつしか忘れてしまいましたが、戦後しばらくたってから、腹ばいになるとずっと痛みを感じていました。

あの当時、部の練習ではいろいろの絞られ方をしたものです。これもその1つで、歯を喰いしばって頑張っているうちに、軽く張った手綱で馬と心を通わせることができるようになるものです。そう

して予科3年のときは羽島、安達両君の3人だけになっていました。

ドック後は、不思議に痛みを感じることなく過していますが、馬術部のメモリアルを体に刻みこんでいるということは、また特別な感慨を呼び起してくれます。

アルバムを整理してみると、旭川での合宿の写真は、17年夏のものが1枚あるきりです。その顔ぶれは予科生ばかりで、私が3年のときのもので、夏の合宿はこれが最後ではなかったでしょうか。皆懐しい顔ぶれですが、その後勤労働員中急死した大西君（京都出身）が1番前の方にいるのも悼しい思い出です。

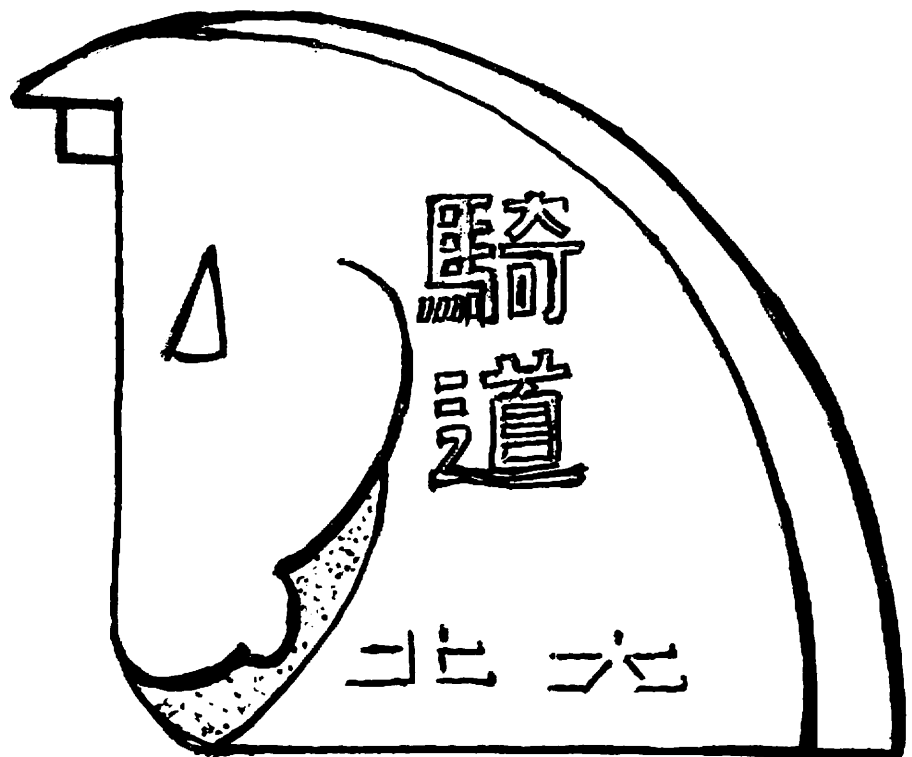
後記

依頼のあった原稿が公務出張のため遅れたことを御詫いたします。

昭和17年入部当時の諸兄は、私の他、本庄（医、故人）宮崎（工）紺野（農）岡本（農、故人）川口（医）田辺（農、医）菊地（医）永田（農）川勝（農）大西（農、故人）久保（農）竹内（農）加藤（農）等で、殆ど公式戦に出場の機会なくして自馬繁養等の苦勞をされた同僚であります。

又昭和18年に入部された方々の名は余り記憶にないので申訳ないのですが、武田（理）赤城（理）君あたりが当時の苦勞を背ったと思います。

又昭和18年度に、北大馬術部（騎道班）員としての誇りを托すバッジを作製、襟にほこらかに着けたものですが、そのデザインを示すと図のとおりです。全体はいぶし銀で、騎道と北大を金で浮出し、馬はゆるい円みを持たしたものです。



苦 闘 の 時 代

(昭和22年卒) 和田 晴

先日小林先輩が加藤君を伴って来訪され、北大馬術部40年をつづる写真集発刊にあたり、当時の部活動の記述を依頼された。既に30年の歳月は、学生時代の鮮烈な印象の残るものが断片的に浮ぶのみで、加えて戦後実家の火災により当時の資料を焼失、わずかに手許のアルバム1冊に10数葉の写真が残るのみであるが、当時の僚友紺野君の日記の1部を借用、不完全乍ら回顧を試みてみた。

私が入部した昭和17年は、既に大東亜戦争が除々に熾烈さを加え、運動部は各部とも報国会国防部に所属し、国防目的の訓練を行なうものとして、馬術部も騎道班となっていた。新入部員は15名以上を数え、予科のキャプテン安達(故)先輩をはじめ、羽島、小林、2年目に山崎、木栓、宇都見、林などの先輩を擁し、北大馬術部の輝かしい業績と伝統を折にふれ聞かされ、岡田、大手、大戸等大先輩の華麗な技術を羨望の眼で見乍ら、学生馬術の風調を身に帯しつゝ、日曜日毎に月寒の63部隊に練習に通ったものだ。又春、夏、冬の休みを利用した旭川5部隊の合宿は、7月、9月、12月、2月と4回1週間づつの集中的な練習として行われた。本庄、宮崎両君が中学時代の経験があったほかは、始めて馬に接する私達にとって、酷暑の中で汗まみれの乗馬ズボンの膝に血を滲ませ、厳寒に手足の指先が凍傷になりかゝるなどの厳しい練習の中から、次第に乗馬の喜びと先輩の偉業を身をもって感ずるようになって行った。然し戦況の進展に伴い、之等の軍隊と連携を持ちつゝ行われた練習も10月頃には63部隊の出動で、日曜日毎の練習は北部軍司令部の将校乗馬を借りることとなり、又旭川合宿も18年2月をもって最後となった。

昭和17年度の部の活動は既に先輩により記述されているが、私達の僚友本庄(故)宮崎両君がそのキャリアを買われ、8月のインターハイに安達キャプテン他と出場したことは、私達に大きな刺激となり、来年こそはのファイトを燃やしたものであったが、遺憾乍ら此の年が最後のインターハイとなってしまう、私達の大きな競技目標が消失してしまった。

昭和18年度に入り、各学部先輩諸氏は学徒動員で学窓を去られ、月寒の軍司令部の練習も5月頃には出来なくなり、松本久喜先輩の御厚意に継り第1農場の実習馬を借り細々と練習を続けるなど、組織立った部の活動は極めて困難な状態となってしまった。頼りの先輩を失ない、満足な練習の出来ない中で北予科2年目中心で如何にして馬術部の光輝ある伝統を保持するか、その責務に苦慮したものであった。

此の年度の主な出来事を順を追って列挙すれば、7月、予科生が樺太国境線に陸軍の飛行場造成の為動員され、現地で見覚えのある軍馬と対面、当地駐屯が63部隊と知り部員1同旧潤の喜びをわかち合った。然し此の動員中、僚友の大西誠一君が過労のため死亡された事は痛恨の極みであった。

8月下旬練習の場を中登別の馬事訓練所に求めて5日間の合宿訓練を行なう。(参加者12名)9月、自馬を持ちたい切望から、小樽で軍用保護馬の登山号(11才)を5百円で購入、瓔珞と命名し

て、札幌駅の裏にあった馬車屋に預託、部員交替で飼養管理をしつゝ練習を行なった。

此の頃には既に学生馬術大会開催は殆ど姿を消してしまっていたが、せめて我々の手で試合をと、9月20日第1回帯広高獣戦を帯広高獣馬場で行ない、本庄、宮崎、和田、紺野、岡本、田辺が出場、馬を熟知した帯広に僅差で惜敗した。又10月20日弘前高戦を第1農場馬場で行ない、大勝したのが、僅かな戦績であった。

その後、前述の瓔珞の練習を中心に、ランニング、ラグビー等で基礎体力作りを行なっていたが、学生々活も苦しさを加え、次第に部活動は下火になり、1月下旬、瓔珞が雪中訓練中疲労と栄養失調で斃れ、その後畜産学科の病理実験用に飼養されていた宮武(18才)を借受練習を続けたが、満足な栄養の与えられない戦争末期で宮武も斃れ、遂に馬術部としての活動は休止の止むなきに至り、記録からも記憶からも昭和19、20年の2年間は全くブランクとなってしまった。

昭和21年11月、終戦後1年経ったが世相末だ混迷が続いている中で、第1回国民体育大会が京都で開催、種目の中に馬術競技が含まれ戦後初めての全国的な馬術競技大会となった。ただ競技用馬の確保が極めて困難な状態であったので、此の大会は名古屋以東とそれ以西の東西学生対抗で行われることとなった。東日本代表を決定する予選は10月中旬馬事公苑で行われ、代表12名選出に対し東日本各大学高専ほか10数校約50名が参加する激戦で、事実上戦後の学生馬術の水準をはかる大会となった。

選抜競技の方法は、第1次予選は鐙を完全に除去した鞍で馬場馬術を実施、基準点以上に達した20数名で第2次予選の障害飛越競技を行なうもので、基礎から高度の技術迄が要求されるものであった。北大からは和田、宮崎、西村(予科)3名が出場したが、当時在京各大学は既に馬術部が活動を開始しており、特に遊佐幸平氏が来るべきオリンピック用候補として目を掛けていた専修大学の喜多井(後にオリンピック出場)主将を頂点として、洗練された技術と練習量を持つ強豪に対し、私達は此の大会に備え札幌競馬場の誘導馬を借り受けて、ひたすら騎坐訓練主体の2週間の特訓のみの無謀とも云える状態で臨んだ。折から在京中の羽島先輩が応援に駆けつけて頂き、大いに感激、奮闘の末、和田が予選通過、宮崎は惜しくも補欠であったが、北海道から2名が東日本代表として第1回国体に出場、京都長岡競馬場で技を競った。これが戦後の公式戦に北大馬術部の名が出た始めである。

翌22年11月第2回国体金沢大会には宮崎が出場、第1、2回の国体を通じて北大馬術部としてわづかに気を吐いたと云えよう。

然し続くべき後輩の育成が殆ど出来ないまま、馬術部の活動が25年迄の眠りに入ったことは、厳しい社会情勢下とは云え非常に心苦しく、拙文乍ら北大馬術部苦闘の歴史として敢えて筆を執った次第である。新らしい時代の今日の輝かしい馬術部の姿を心から祝福すると共に、先輩諸氏よりの伝統を継承、益々発展あらん事を祈念するものである。

昭和26年
29年



昭26・11月 畜大定期戦祝勝会



昭26 畜大定期戦



昭26 畜大定期

北大対帯大復活第一回馬術定期戦

日時 十月二十七日

審査標準 (減点法)

場所 北大第一盛場馬場

主催 北大体育会

会長 土泰教授

顧問 松本教授

審査委員長 崎崎技官

選手及び馬名 (併シ抽選ニヨリ決定ス)

馬名 北大 帯大

1. ブランデー 古里昌司 緑澤 敏広

2. グリンセス 後藤 義英 本間 利次

3. リガレント 下飯坂 隆 高木 秀雄

4. チャンプ 水井 重義 吉田 和夫

5. ブランキー 渡根真一郎 井上 隆夫

6. 永田 直巻

一、減点規定

1. 落下 (前後投區別ナク)……………3点

2. 転倒 ()……………3点

3. 拒否、逃避、一回目・二回目共ニ

二回拒否、逃避ノ場合次ニ向フ 5点

4. 落馬 (馬糞ノ不備モ含ム) 30点

5. 人馬衝突及馬鞍 20点

6. 経路違反 次後失格

7. 狂奔 (審査長ノ判断ニヨル) 次後失格

二、一障礙二回拒否或三ヶ所ニ及ツ時 次後失格

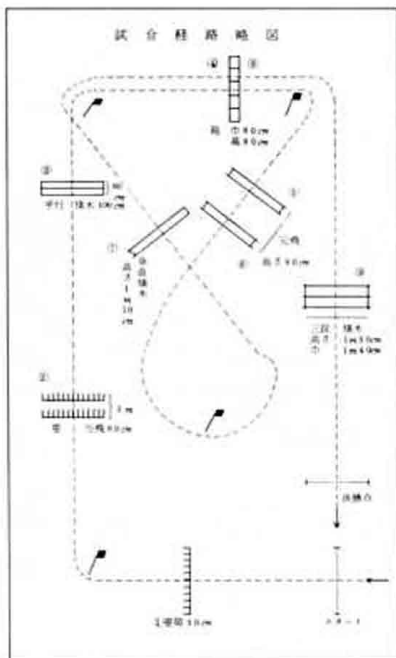
三、 減点10点

四、 所要時間三分トシ

三分ヲコエル時ハ次後 権

五、 減点数少キモノヲ上位トシ同点ノ場

合ハ所要時間少キモノヲ上位トスル





東北・北海道学生馬術大会

昭27 東北・北海道学生馬術大会



昭27 夏 東北・北海道国体予選



昭
・
27

東北大定期戦

於仙台



昭27・7月 合宿にて



昭27・9月 畜大定期戦 於帯広



昭27・10月1日 帝大戦 於涌谷(宮城)



昭28・3月 お別れ遠乗会にて



昭28・7月 東北大定期戦 於北大



昭28・8月 東北・北海道馬術大会 於盛岡



昭28・8月 東北・北海道馬術大会
大久保氏



昭29夏 練習後 於競馬場



昭29・6月 北海道馬術大会 於札幌



昭29年 七 帝 於岡崎



昭29・8月 帝大連盟 於岡崎



昭29・8月 東北・北海道大会 於福島競馬場



昭29・8月 東北・北海道馬術大会 於福島



昭29・11月 荒川調教師送別会

戦後馬術部復活の思い出

昭和28年卒 後藤義英

まだ戦後混乱期の名残があり学生生活もアルバイト等の出現を見ると同時に経済的にも不安定であり物資なども潤沢な時代とは言えなかった頃と思います。

北大の歴史ある馬術部を復活しようという話がなんとなくおこり、当時農学部畜産学科の松本教授の意見と指導を得、同好の者が数人集り部を結成したのが確か昭和26年と記憶いたしております。

当然北大には乗馬もなく、また馬場もないというような状態から、当時の競馬場のご好意により馬匹及び指導をいただき、古い競馬場の正門前で毎日のように練習をしたものです。

考えてみますと現競馬場の正門前の駐車場あたりの位置にあたり、大きな「獣魂碑」があったことも思い出に残っております。

その後第一農場馬場で練習を開始すると同時に、旧帝大戦あるいは帯畜大との復活戦等、また国体の出場と全く多彩な行事をもつ馬術部が復活されたわけですが、現在から考えると本当にのんびりとまた本当に楽しい馬術部の活動が走馬灯のように浮んでまいります。

半沢先生退官記念誌を40年誌もかねて発行するにあたり、昭和28、9年頃について何か書いて欲しいとの編集子の再三の御依頼をうけながらも、毎日あくせくとしていて落着いて過去を振り返る事も出来ない、無気力さを心苦しく思いながら、しかしこゝまで追い込まれれば鈍馬も飛越態勢に入らねばと思ひ筆を取った次第です。

想い起すと馬術部復活以来しばらくは、乗馬と言えば札幌競馬場でありました。明治の開拓史時代から伝統のあった札幌競馬場は戦後の一時期進駐軍競馬もありましたが、札幌競馬クラブも農林省に移官して所謂、国営競馬が行われて居りました。昭和26年といえば有名な「幻の名馬」トキノミノルがダービー優勝後被傷風で死亡したため、新聞紙上をにぎわして居りました。

馬の資源がなかったため競走馬も米国や濠州からの輸入したものが多く走って居りました。札幌競馬場で心力をついて全く走らなかったドクターレイというアメリカ馬は後にネプチューンという名で荒木雄豪氏の乗馬になりました。

戦後の混乱は次第にうすれて来ましたが、まだ米軍が進駐して居った時代です。幸か不幸か、(北海道の馬術界にとっては天から降った幸運であったかも知れませんが、朝鮮人民と日本の民主勢力にとっては大変不幸な出来事であったと思います)真駒内駐とんの米騎兵師団も朝鮮に出兵のため、持っていた乗馬を道庁にその処理をまかせてゆき、その馬達の一部が札幌乗馬クラブの発生をうながし、更には北大馬術部復活の大きな起動力となりました。当時の札幌競馬場長は古関氏でありましたが、そのお嬢さんは北大文学部で卒業生の名簿には載って居りませんが、馬術部女子部員の嚆矢ではなかったかと思ひます。練習にあたって何かと御指導やら具体的御面倒を見ていただいた業務課の姉崎保氏は東京獣医学校(現日大)のO・Bであり、吾々の馬術とは殆速い感のある練習に助言を受け、細かな事に気がつかれた氏から多くのお小言やら苦言を程されました。ですから練習が終ると馬の無事など報告にあたって、恐る恐る業務課のドアを叩いた事を今更の如くなつかしく想い出します。又姉崎氏はお酒の方も仲々お好きで、酒のつまみ代わりに、部の規律の事や、下手くそぶりをこき下されたりしましたが、30年頃か、胃を手術された時は、大久保君なども付添をしたりして、当時は一面では部の親代りでもあったと思ひます。

競馬場には同時に、元騎手であられた芝坂寅吉氏とか、高橋留次郎氏とか、就本氏とか馬も好きで、乗馬の上手な方が居られました。特に芝坂さんには馬具の事から、クラブの馬で不足の時には当時乗車代りに使っていた乗用馬車の軽鞍馬、連山、初花等を供してもらうなど好意をかけてもらい、大久保君などは、初花に裸馬で乗せられ、調馬索で廻されながら、手を後に組んだりさせられて、特訓も受けたりしました。こうした多士齊々な馬の専門家の直接の指導を受けられた事は、単に乗馬の技術だけでなく、厩舎管理、飼養管理の面など、自馬を持つに当たってたいして不安なく馬を持てた事に大いあずかって力があつたと思ひます。

当時はまだ完全に物資が豊富な訳ではなく学生が乗馬用長靴を持つという事は大変な事でした、大抵知合の元将校の人から分けてもらうとか、兵隊用のゴツイ赤長靴があれば上等の方ではなかったかと思ひます。週に三日、重い長靴を引ずって競馬場にゆくとクラブの馬は皆、米兵が乗っている、し

かも吾々が禁止されていた走路内でのキャンター、ギャロップで馬がアワを吹くほど汗だらけで、とても可哀想で、今日は練習中止、又なんとか競馬場の太い便役馬の勝山でも乗せてもらうかという事もありました。

28年秋からは翌年行われる準備活動が北海道馬術界の最大の行事となりました。練習は全てその目的に深い、それを防げない範囲内での事でありました。去年なくなられた恩師の松本久喜先生は、国体用馬20頭の購入のため胆振日高十勝等を廻られました、次第に乗用馬資源の涸渇して来た頃でもあり、経産馬も含んでいたようです。千葉君が見事、富山国体で優勝された北楡号(ミスアプテール)は受胎していたのを人工流産させた等という話しも聞いて居り、先生も、日高実験牧場の創設期でもあり、軍馬時代が完全に終焉をつげた時でもあり、大変な御苦勞であったと思つて居ります。

29年春となると道馬連は国体成功のために在札の乗馬家を糾合して、調教師の元橋、荒川両先生の指導の下に、早朝から調教を兼ねた乗馬練習を行いました。その中には半沢先生、高杉先生、石村先生、前野先生など戦前O・Bの方も熱心に参加されましたし、東大O・Bの中本氏現在も乗つて居られる小林氏、山本氏、布浦氏、新矢氏、門脇氏等の札鉄勢、高校生の富岡君、芳松お姉さんなどにぎやかなものでしたし、特に前野先生は一生懸命でした。そうして親ぼくを深めるためによく遠乗会をやつたものです。大抵のコースは円山公園往復というところですが、当時はまだ道路の車輛も少く楽しいものでしたし、その上前日迄競馬場内で飼つていた緬羊を屠殺して(これも私達の仕事でした)馬から降りたらジンギスカンで一杯という事で、その頃としては大変ぜいたくなものであり、吾々も知らず知らず焼酎の旨さを教えられたというところでした。

いづれにしても当時の北海道の馬術界での国体開催という事は大事業でありました。特に大部分の選手と馬取扱人を厩舎に宿泊させたため、日赤の赤い毛布を借用して居りましたが、帰途鞍下用に失敬した人もあるらしく員数不足で、面目まるつぶれの事やら、食券の間違ひとか、厩舎割やら夜中に到着する人馬の受入れ等、全く強化練習とは別の苦勞が多々あつた事も今ではなつかしい思い出になりました。しかし大障碍飛越に於ける三重県の常歩宏一(現川口宏一)選手のサラブレッド、イマリユラの姿、東京パレス乗馬クラブの栗毛の名馬山吹き美しい飛越等、当時高度の競技を見ていない私達には何にも代えがたいものであり、東京オリンピックの外国勢の乗馬を見た時のような感激を覚えたものでした。

この間帝大戦を開催したり、東北北海道をやつたり競技も色々行いましたが、何時も太泰部長を始め、松本先生には色々お骨折をいただきました。又その度毎に半沢先生には賞状書きの仕事をお願い致しましたし、高杉先生や庄内氏、姉崎氏には度々審判のお願いをし、終つてから酷評をいただいたものでした。特に半沢先生には庶務時雑用を色々お願いして、いつも快よく引受けていただいた事を今更の様に心から感謝致して居ります。

30年誌には書かなかつた裏話のようなものばかりとりとめなく書きましたが、最近の馬術部の事について一言申させていただきます。半沢先生の大変な御努力で立派な厩舎と馬場が出来ましたが、成績の方は今一つというところのようです。この点では練習方法、やはり問題があつたのではないか

と考えます。どんな乗り方をしても10年も一生懸命やれば誰でも一定の域には達するものですが、大学4年間で一定の水準に達するためには相当の科学性に裏付けされた練習でなければなりません。今は亡き菅間先輩が「学生選手権大会の想出」(30年誌)に書いて下さっているように、「あらゆる扶助即ち精神、拳、脚、騎坐、腰と全てを総合し又独立に使うことは絶対に忘れてはならぬ事)をかみしめてみたいと思います。馬術は人間のスポーツであります。そのためにどう馬を理解し、馬と調和し協力するか、馬を主体に考える事は極限として当然の事ですか、やはり人間のなす技であるという事だと思います。馬を一面では支配し、服従させる、又一面では大事にし、楽にさせてやる。鞍上人なく鞍下馬なしは理想ですが、一つ一つの馬を支配し、服従させる技術もマスターした上での事であると考えます。現部員の御精進を切にお願い致します。

昭和30年～32年



昭30 卒業生送別コンパ



昭30 新入生



昭30春 畜大定期戦 於札幌



昭30年6月 帝大連盟戦 於京都



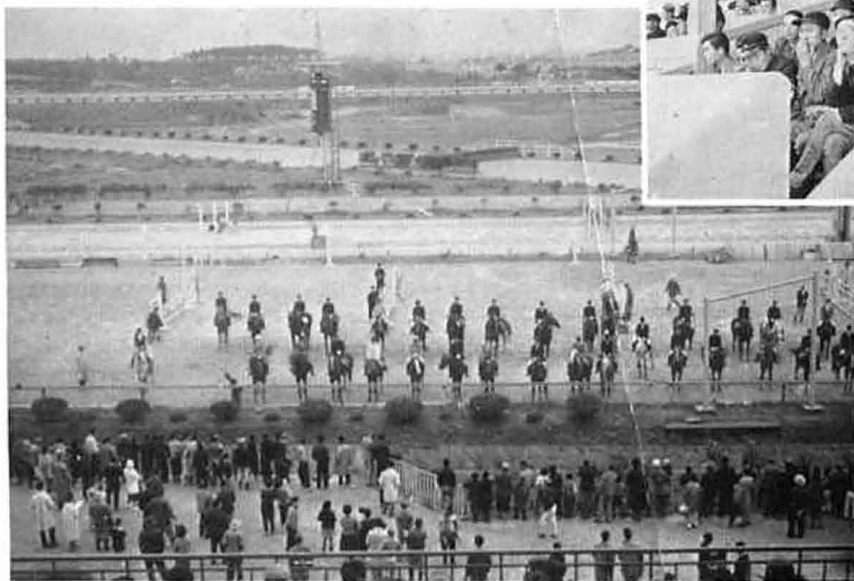
昭30 馬術部員一同



昭31・7月 七帝戦 於札幌



昭31 対同好会定期戦



昭31秋 国体
於兵庫

昭31 秋 国体 於兵庫



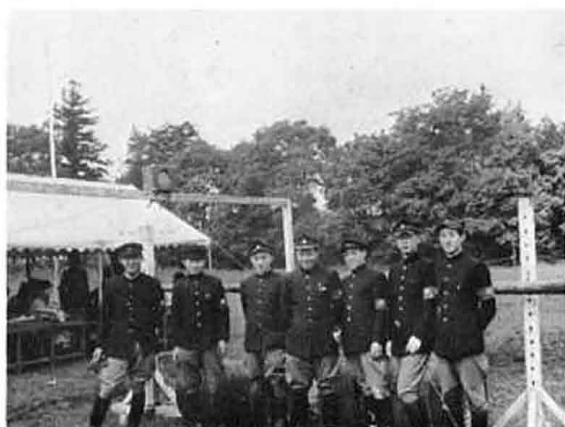
昭31の成果



昭32年 部内競技会の後



昭32 アルバイト



昭32 東日本大会



昭32 東北・北海道学生馬術大会 於札幌



昭32年 11月 日高新得にて



昭32・11月 対帯畜戦春期戦 於帯広

雑 秘 話

昭和 31 年卒 大久保 利 彦

学校を卒業して早くも 18 年になりますが、やはり馬術部での生活は一生忘れることが出来ません。最低の金で、最低の頭脳で、学生と云う最大の特権を利用し、超低空飛行で無事卒業した一人が此の私です。

1. 馬術部への入部

昭和 27 年 3 月 1 日、私は東京で北大の入学試験を受けました。9 時すれすれに試験場に入り、決められた席に着き一生懸命問題に取り組みやっと入学が許可された次第、試験場で私の前で頭をひねっていたのが加藤元君、国語・社会・英語の時は時間途中でさっさと答案用紙を提出し廊下へ、逆に 2 時間たっぷりかかりふうふう云わされているのが私、所が数学・理科になると元君は 2 時間たっぷり、私はさっさと廊下に出て、共に合否不明のまま 4 月入学式に間に合うよう上野駅に行った所、新しい角帽をかぶり並んでいたのが元君、ここで始めて自己紹介、共に合格を祝いつつ汽車に乗り込み、北海道に行くからには北海道でなければ出来ないスポーツをやりませう。それは馬に乗ることではないだろうか、と云う結論になり共に馬術部へ入部。

当時のキャップは古谷昌司先輩、マネージャーが後藤義英先輩、共に大学生のタイプでなく立派な紳士、練習の時は純白の上衣、大会の時は学生服、普段は背広と…………。

そこで先づ白の上衣を作ろうと云う事で古谷製菓より小麦粉の袋を二枚百円で買い漂白して作ったのが別添写真の通り。

2. 獣医学部への移行

1 年半の教養学部を低空飛行しながらも無事通過して、私は希望学部を書かずさっさと馬術大会のため、あちらこちらと遠征、帰つて見たら「あいていたのが獣医学部、君は馬に乗っているから手続は完了しているよ。」と云われ、どんなメンバーかなと思って獣医学部へ入った所、加藤元君、千田哲生君、三浦勇一郎君らと一緒に先づ一安心、代返にもノートのつき合せにも全く事かかないと思っていたら、何と試験は一人 30 分の口頭試験、これにはびっくり、対策を構じたのが通常的口頭試験には「馬術大会の練習のため後日お願い致します。」と申し出ることにして、後日とは何時が良いか頭をひねり 12 月 24 日・31 日・1 月 1 日・2 日・3 日が我が方に最も有利と判断（教授は家族持ち故）、その日に「今から試験をして下さい。」と申し出ると教授云く、「自分から申し出て来るには自信ありとみた、優をやるからよろしい。」で終りになったが、この様にうまく取り運んだのが僅か四割、私の読みの甘さ。

3. 夏期合宿

北大に自馬がなかった頃、札幌競馬場で競馬開催中は乗馬クラブの馬を北大農場にあづかり、部員が管理する事があった。此んなチャンスを逃がしては合宿は出来ないと判断し希望者だけ合宿した時の事である。夏は日がくれるのが遅いため充分馬にも乗れたが、夜の時間をもてあまし、皆で

相談したがネオンに近づく金は無し、かと云って彼女がいる様な部員もおらず、決ったのが翌朝外乗、行き先は馬で行動出来る範囲内、乗馬のまま収獲出来る様な条件で食べる物を作っている畑を探すこと。

その夜のアタック風景は、馬にクラを付け学生服を裏がえしに着、ワラジかゾウリ、帽子のかわりに手拭でホオカブリ、リックは胸前にし、収獲中は下馬をしない事とし〇〇地区のトウキビをリックに4ケ。何とも云えない美味さ。シンは馬のために給与しよう云事になり云く「愛馬のためには夜も働く」と。

4. 冬 期 合 宿

札幌乗馬クラブの馬と、国体用に買入れた馬をあてにして、競馬場の社宅を借用、合宿をした時の事。マキはどうか、石炭はどうか、となり思案の結果次の通り。

マキは映画の看板を夜馬でアタック、石炭は桑園駅の石炭置場よりいただく事になり、先づベンチを持ち午前5時出発看板をはずし持ち帰る。石炭は、リヤカー1台、4斗オケ1ケ、スコップ1丁、竹ボウキ1本が道具(全て競馬場より借用)、先づリヤカーに4斗オケを乗せ、石炭置き場に忍びよりスコップで石炭を4斗オケに入れ引いて帰る。但し車輪の跡がはっきり出るのでリヤカーの後を竹ボウキできれいにはき車輪の跡を消す。4人1組。お陰で冬期合宿は大成功。

5. 賞 金 か せ ぎ

年数回選手として5~8名が遠征するとなればかなりの資金が必要であった。親のすねかじりで全部自まかないも困るし、やむを得ず道営札幌競馬に学校には内緒で競走馬として2頭出場させる事に決め、先づポブラ並木を走らせ汗取りをし、出走馬として登録、競馬開催当日は、部員の某君が下見場を廻るアルバイト(賞金の1割)、私は誘導馬に乗る、そうして馬場に出た所で各騎手に馬の調子を聞き、すぐ馬券買いに走ったものでした。

所で自馬2頭は走れども走れども入賞せず出走手当のみの入金。

今日が最後と云う日に、北大家畜病院の御協力を得て万全の策を構じ(?)距離も考え出走させた所、やっと入賞、賞金を手にした時の嬉しさ、今だに忘れられません。最も馬術部の競走馬は10才と12才であっては仲々入賞も出来ないなと思いつつ馬術部の馬舎に引き上げて来たものです。

現役部員諸君よ、我が青春に悔い無き様御活躍あれ。

昭和32年度卒 樋 口 正 明

昭和29年の入部当時は、馬術部が戦後再建されてから数年を経過した時期にあたり、念願の自馬

を得て、部内に活気がみなぎる興隆期であった。その後、対外試合に全勝するという戦後の第一期の黄金時代を経て、部の活動が先輩諸兄の努力によって軌道にのってきた後を引継ぎ、32年度の主将の任にあたった。

自馬6頭を得たあと、部の活動は活潑となり、練習はもりあがり、技術の向上は著しいものがあったが、自馬の調教ということに関しては、どうしても弱体であり、なんとかして、指導面の強化を図る必要が当面の問題として存在した。

この技術的指導者の確保という緊急な課題については、当時の北海道馬術界の第一人者である鎌田先輩が、再び馬術部の活動に参加されるようになったこと、また、全日本学生馬術選手権大会に出場し、さらに、東京で東園先輩から馬場馬術の基本的指導を受けた岡本先輩が、北大の大学院に進学されるという幸運に恵まれた。そして、部員一同が、身近かなところで理論的実地指導を受けることができるようになって、各自の研究、討議は盛んとなり、日常の練習、合宿訓練等も、もりあがりが見られるようになった。

このような願ってもない機会を得て、自馬の調教及び部員に対する理論的指導は、強化することができた。また、当時のパレス乗馬クラブの印南先生が来道された際、馬場馬術の指導をしていただいたことも、貴重な経験となっている。

このようなことが、その後の各種の競技会（自馬・貸与馬とも）での北大の好成績をもたらし、特に、自馬競技の馬場馬術競技についていえば、後年、千葉選手が国民体育大会の複合競技で優勝するという成果につながっていると思う。

32年のことで、最も印象強く残っていることは、6月、東京農工大学で催された東日本大学馬術争覇戦で初優勝したときのことである。この競技会に北大は、前年初参加してトーナメントの一回戦で苦杯をなめさせられたあとだけに、部員一同の喜びは大きかった。関東の強剛チームを相手に戦っての、シーズン早々の、この優勝の実績は、部員全体に自信と、さらに一層の意欲を与える結果となり、その後の国立7大学戦（帝大戦）をはじめとする団体対抗の競技会にすべて好成績をあげることができた。

自馬関係の競技会については、31年秋の国民体育大会（兵庫）と関西馬術大会（兵庫）に札幌乗馬クラブの洋孝号等とともに、北大の北斗号、北嶺号が参加して入賞の成績をあげている。特に、当時2年生の山本智選手騎乗の北嶺号は、関西大会の6段飛越競技で、当時の日本記録の高さを飛越して優勝するという快挙を果たしている。

以上のように、各種の競技会で好成績を得ることができた理由としては、部員全体が結束して常日頃の練習、自馬の飼育等の部の活動にあたり、いつも良好なチームワークで競技会に参加することができたこと。また、鎌田、生田、千葉という強力な選手をはじめとして、個性ある優秀な人材が多くいて、選手層が厚かったということがあげられる。対外試合の際、馬ワリで悩んだことはほとんどなく、試乗の馬をみて、使用馬の癖がわかると、すぐ、これには誰、あれには誰ということが、すらすらと頭に浮かんできたものであり、そして、実際にそれで成功してきている。

この年の画期的なこととしては、女子部員の対外試合初参加があげられる。中村美幸選手が、東北

•北海道地区の各県対抗戦に北海道チームの代表の一員として参加し、北海道に優勝をもたらしたことは、北大の女子馬術の前途を明るくしたものとした。ひきつづいて、福島での関東、東北女子学生馬術大会にも参加するようになり、その後の片山、佐藤、高階の各選手の活躍へと発展していった。

年間計画を検討した際、各種の競技会にできるだけ多く参加し、好成績をあげるという目標をかかげたが、このことは、復活してまだ日が浅い馬術部の存在をPRし、部に対する評価を高めさせるためにも、活動の実績を示すということが、当時の実情として、どうしても必要であったわけである。この点、最も効果的なことは、全国優勝をすることであったが、当時、全国大会そのものが存在せず、全国大会の実現のための努力が、まず必要となっていた。かねてから、関東と関西の間で実施されていた全日本学生馬術王座決定戦を、全国的規模の大会にすべきであることを、北大としては、官沢先輩の頃から主張し、馬術関係者に、はたらきかけを続けてきていた。

しかし残念ながら、32年度には、全国大会は実現せず、全国優勝を争うことはできなかった。北大馬術部の数年間にわたる努力は、結局、その後、馬術関係者の賛同を得て、全国規模の王座決定戦が実現することによって結実した。そして、さらに後年、部員諸君の努力によって、この全国大会に優勝し、全国の大学の王座を獲得するという、我々の果たし得なかった夢がかなえられたときは、この大会実現の経緯を知るものとして、喜びもひとしおのものがあった。

一方、年度当初に同じように、目標にかかげた馬術の普及に尽力するということが、ややもすれば、対外試合の日程に追われて、計画倒れになってしまったことは、かえりみて大いに反省している。学内における、一般学生を対象とする馬術講習会を実施したほかは、みるべき成果に乏しく、高校馬術の育成ということも、練習時の指導を行なって、若干の援助をすることができた程度になってしまった。

私としては、このことがたいへん心のこりであって、2年後、東北・北海道の高校馬術大会が福島で開催され、北海道からも参加することになった際、志願して高校生諸君に同行した。そして、福島で使用する競技馬は、ほとんど性質を知っているという経験もあって、選手の皆さんが大会で好成績をあげるお手伝いを、多少なりともすることができたとして、みずからをなぐさめたものである。

最後に、学生時代、「馬キチ」といわれるほど、馬術部にすべての情熱をささげた生活をふりかえって、当時の馬術部の魅力、第二に、個性的で人間味豊かな先輩、同僚、後輩が多かったという事実、第三に他の運動部にみられない一種独得の雰囲気にかかれるものがあったからだと思う。

昭和33年～35年



昭33 東北・北海道学生戦 於盛岡



昭33・6月28日 東日本学生戦 閉会式 於東京



昭33・6月29日 東日本学生戦 於東京



昭33・8月 於北大第一農場



昭33 全道学生馬術選手権大会メンバー



昭33 部内競技会



昭33 部内競技会



昭33・11月 日高での遠乗



昭33・10月 富山国体



昭33・10月 全日本学生自馬選手権大会
於 名古屋



昭33・10月 全日本馬術大会 於名古屋



昭34 合宿



昭34 合宿明け



昭34・7月20日 東北・北海道学生大会
大場氏 於札幌



昭34 対北大同好会・札幌定期戦



昭35 合宿



昭35 作業のあと



昭35・6月 東北・北海道学生大会



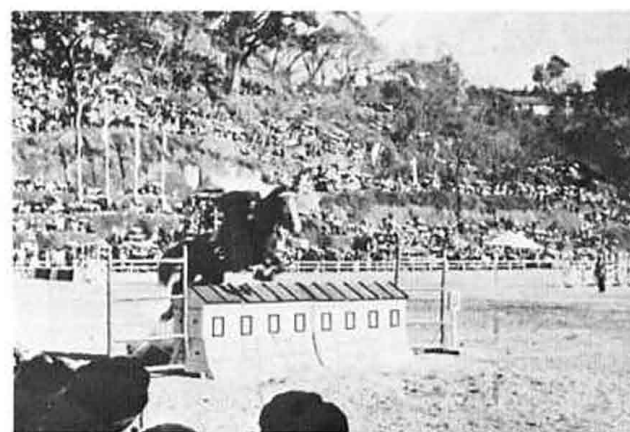
昭35・8月 七帝戦 於京都



昭35・9月 全道馬術大会 於北大



昭35 関東北女子馬術大会 於福島



昭35・10月25日 熊本国体 大場氏



昭35・10月23日 国体パレード

北 慄 号 の こ と

昭和34年卒 生 田 勝 一

あの馬のことを思うと、今も胸がときめく。精悍にして繊細、ナイーブでヒステリックで、そこがまた愛らしかった。アオに近い黒鹿毛の肌に、夏になると鮮やかな連銭が浮き出た。時に、まん丸い目をつりあげ、耳をそばだて、髪ふり乱し、尾をはねあげてはねた。その姿に野性味があった。

私が入部した時は「ミストクシマ」といった。トクシマの名がどこでついたかは知らないが、生れは浦河であった。29年の札幌国体のあと購入し、戦後初の自馬となった8頭のなかの1頭である。

最初の出合いはみじめだった。またがれば振り落とされる。新入部員など、そばにも寄せつけない気位の高さがあった。馬場でこの馬に当たり「飛び乗り」の号令がかかるとちぢみあがった。ものの10秒とも、じっとはしていない。馬場の中央で何度か振り落とされ、腹の下でおむけになってのびてしまったことがある。四肢をチャカチャカさせ、勝ち誇るかのように鼻孔をふくらませる奔馬を見上げて、むしろ壮快な気分だったことを覚えている。

思い出は前後するが、確か3年目の冬のことだった。厩舎でボロ出ししていた私の所へ、ポブラ並木で騎乗していた部員が血相変えて知らせに来た。「北慄が暴れて抑えられない」という。そのころはすでに、わがお手馬である。キャップとしてのメンツもある。なんなく乗りこなし、興奮を鎮め、「どうした、猫のようではないか」とやったまではよかった。その慢心が彼女の勤に触ったのか、騎乗したまま厩舎へ帰りかけ、石炭列車引込み線の踏み板の上まで来た時、突然はね出した。不意を衝かれてたまらず落馬、後頭部をレールにしたたか打って気を失った。気が付いたのは、北大病院整形外科の治療室。幸い4、5針縫っただけの奇跡的な軽傷で済んだが、今も残る後頭部の豆ハゲは、その時のほろ苦くも甘い青春の傷跡である。

この名うでの暴れ馬が、手入れの時はどの馬より扱いやすかった。馬場での狂奔ぶりの、せめてもの償いであったのかも知れない。改名の時、先輩が「北慄」などと難しい字をあてたのも、激しく、気難しく、剽悍で、それでいて可愛いさのある性格に敬意を表してのことだろう。

私のお手馬になったのは、2年目の後半からであった。競走馬時代の名残りの首の固さと、左前肢のエビハラがしばしば再発する欠陥はあったが、飛越能力は抜群であった。この馬で大障害飛越競技に挑むのが、私の夢だった。

最初の遠征は、32年の全日本大会（馬事公苑）とその折の東京大会（パレス乗馬ク）である。成績は両大会とも芳しくなかったが、この時の馬輸送で、私はこの馬に心身ともにのめり込んでしまうことになった。

馬事公苑から馬運車でパレス乗馬クへ移送され、いわゆる宮中のお馬所の豪華さにまず一驚した。古色蒼然として、それなりに豪華な厩舎、広々と10畳間ほどもある馬房、格式の高さ、キラ星の如き名馬。正直なところ、競技の前日、厩舎に入っただけで圧倒されたのだが、それだけにわが愛馬を1人残して去るには忍びなくなり、秘かに馬房にもぐり込んで1泊する覚悟を決めた。

馬丁氏の目を盗んで、寝ワラをどんと入れた。日没、夕餉のあと大手門を出て神田へ走り、八百屋でエンジンを大量に切ってもらい、ジャンパーのポケットに詰めた。馬房は幸い入り口に一番近い。夜陰に乗じてままと忍び込んだ。愛馬も寝床が変わって落ち着かないのか、広い馬房の中をうろうろしていた。エンジンをやり、気を落ち着かせ、すみっこの方に丸くなって横になった。ポケットウイスキーをちびちびやっているうち、手前の方が先に気が鎮まりウトウト。翌朝、人馬ともにさわやかな目覚めであった。が、私は着ていたジャンパーを見てアッと驚いた。両ポケットともボロボロである。夜食のエンジンを断りもなくきれいにたいらげて、彼女ははとも満足そうであった。

泥酔すると馬房にもぐり込んで寝てしまう“奇癖”は、この時がきっかけだった。パレスとは比べものにならないわが部の狭い馬房で、時には大の字になって中央を占領したこともあったから、彼女はさぞ迷惑したことだろう。そんな時、彼女の方が小さくなって、酔いざめの私の顔を困ったように見つめていたものだ。

83年の富山国体は、私にとって最後のチャンスだった。左前肢のエピハラは依然思わしくなく、湿布を続けながらの調教で無理はできなかったが、大障害には秘かに闘志を燃やしていた。あのお転婆も、本当に猫のように従順だった。気心も十分合っていた。「まかせておきなさいよ、ワタシが飛んであげるから」そうささやきかけているようにも思った。

スタートから快調だった。大げさにいえば天馬空をゆく気持だった。第七障害のあたり、「これならいける」と思った。一瞬の気のゆるみが落とし穴だったのか、1メートル20のなんでもない横木で一拒止。後ろでワーッとあがった喚声が耳に残っている。結局、この失点で銅メダルを逸したが、ラス前の水濠、最後の1メートル40の3段横木を、ともにかかなりの余裕をもって飛越した時の気持は、なにものにも替え難い。まさに、青春に悔なしであった。

卒業した年の秋、悲報を受け取った。外乗で不慮の事故に遭い、急死したのであった。14歳であった。タテガミと尾を少し切り取ってもらい、届けてもらった。今も、私の宝物として大事にしている。

昭和34年度卒 森 本 梯 次

生来不器用でドジな男なので馬に乗って手柄を立てるよりも落ちた話「落馬」には事欠きません。

入部して1ヶ月か2ヶ月過ぎた5月か6月頃やっと馬の背で上級生の号令が耳に入り始めた時にアブミ上げをやらされました。北嶺という有名な馬ですが、ものすごく反どうの高い馬で、ヒザと鞍との間から向りがよく見えるような騎座で遠足をやらせられて、落ちたことといたらわずか15分か20分の部班運動で10回近く落馬したことを覚えています。何しろ馬場を1周するかしないうちに落ちる訳で、それでも馬場の中央で怒鳴っている先輩方は助けてくれず、ニヤニヤ笑っているだけです。最後にはヒザはガクガクで飛び乗るのもやっとという状態でした。

それが東京の馬事公苑で行われた国体でこの北嶺号に乗って六段飛越に出場した時にも見事に落馬をしています。5回目の飛越で最終障害（1メートル70）を飛んで着地して2、3歩行ってポロリとやりました。何しろ1メートル70となると馬の背に乗っていても目の前に立ちはだかる感じがするもので、馬も人もやっと飛び越えてやれやれと思ったのでしょうか。この時はお蔭様で1位になることができ御愛嬌で済みました。その他北翠号で収草畑の雪の上を引きづられたり、ポプラ並木で北斗号から滑り落ち気が付いたら馬がのんびり草を食べていたり、又帯広畜大との定期戦に始めて出してもらって、洋孝号で落馬したり場外へ出たりと教え上げたら切りがありません。しかし北嶺号の落馬は特に馬術部生活の始めと終りの事なので一番印象強く残っています。

あの日あの時 - 30年史編集の頃 -

昭和37年卒 東京OB会 大馬善明

椅子に寄りかかりながらあらためて「馬術部30年史」を膝の上で両手にはさんでみる。北海道大学馬術部30年間の記録としてはうすっぺらな書物であるが、当時その何分の1かのお手伝いをした者としてこの種のをまとめる忍耐と苦労の重みを感じます。現在「写真集」出版で苦しんでいる編集者のご努力も理解出来ます。と同時にあの当時の諸先輩、部員が一致協力してくれた情熱のぬくもりもこの書物は私に感じさせます。今となってはこんな思いも良いものです。「30年史」編集後記にも書ききれなかったことなど思い出させて下さい。

<やらんきゃない>

当時のサイロわきにあった馬術部部室の中で、私はいつもこんな言葉を口走っていたらしい。「それを直ぐにやらなければならない」そんな気持だったろう。私のそのような1人言を聞いて当時、森本梯次先輩が象さんのような細い目で良く笑っておられた。あの「30年史」について云うならば当時の私にはこの一言「やらんきゃない」がすべてであったように思う。ちなみに当時の森本先輩の口癖は「やりゃあいいんでしょ」だったと思う。

<苗穂刑務所>

正式の名前を私は知らない。札幌で生まれ育った私共は小さい頃からそう呼んでいた。場所も知らなかった。ただ“苗穂の先で玉ねぎ畑が沢山ある所の奥にある”位しか知らなかった。札幌に生れ30年以上育ったのだが全く未知の場所であったのだ。それがどんな縁か忘れたが吉田亨君が「30年史」の印刷を“ケイムショ”に発注すると云って私は驚いた。以前に北大入試の問題用紙を刑務所で印刷したが、数学の問題で「シグマ」の活字がなくアルファベットの「M」の字を横にしてやっと刷り上げたと云う裏話を教養部の教師から聞いていた。そんな所で果して難しい馬術用語を使う「30年史」の印刷が出来るのか心配だった。しかし吉田君、三浦清一郎君などが何度も私の一度も知らない「ム

シヨ通い」を進んでやってくれました。私が内心、一番心配だったのは出来上った「30年史」の奥付けに“札幌刑務所印刷”と入るのではないかと云うこと。そんな「30年史」を当時の太秦部長に持って行くのが正直な所恐かった。しかし出来上った「30年史」には“印刷札幌印刷部”とありました。

<刑務所 その2>

「30年史」が出来上ったのが36年の12月、クリスマスの頃だったと思う。恵庭寮の三浦君から「出来上った」との連絡にさすが嬉しかった。雪道の中を刑務所まで引き取りに行かねばならなかった。当時の部員滝沢由子さんの運転による車で出かけた。あいにくの猛吹雪の中を三浦君、小島武君なども一緒だった。苗穂の街並みを通り過ぎ、寂しい畑の真中の一本道、だんだん道幅は狭くなる一方で女性ドライバーの細腕に少からず不安を感じた。道端に並ぶ電柱のみが刑務所への道しるべだった。腰までつかる吹雪の吹きだまりも何度か車を降りて「ヨイシヨ、ヨイシヨ」と後押ししながら突破。やっとたどりついた刑務所内は思ったよりもあたたかく感じた。こんなきっかけからと思うが、その年の夏頃から始った我が愛馬達の極度の食糧危機にも刑務所が一役買ってくれた。当時の飼育係玉沢一晴君も北大農場から支給されていたえん麦も底をつき大変苦労していた。ささやかなアルバイトによる資金で桑園駅の近くにある飼料店から前借りしたものの「学生さんは支払いが悪いから……」としぶられ途方にくれてしまった。その飼料店の電話番号今でも憶えている。確か「シナヲミロ」（4736番）それまでが私共には意地悪に聞えた。お金がないのだから品も見られなかった。そんな時刑務所から救いの手あり、春先のうちに買付けを約束してくれるなら市価より安いえん麦を提供しましょうと云って来た。こうして見ると刑務所にも大変お世話になりました。

<二重橋>

そうこうしてやっと出来上った「30年史」先ず最大の援助をしてくれた東京OB会にお礼方々届けるべく三浦君と私で汽車に乗り込んだ。冬山用の新しいキスリング・ザックを買い込み、何冊入れたか忘れたが兎に角一杯まで入れて私がかついだ。途中、確か青函連絡船と思ったが乗り降りの際にザックを背負うベルトの取付部分が引きちぎれて困ったことを憶えている。どの位の重さだったかを正確には憶えていないが、いずれにせよ現在の私にはとても背負えない重量感があつた。何とか無事に東京に着き樋口正明先輩、吉田君などに様子を聞いて宮内庁の東園基文先輩に届けることとなった。志水一允君が近所からライトバンをチャーターしてくれて宮内庁のある皇居に向つた。最初の通用門は事情を話して無事通過。皇居内の縁に見とれて走っているうちに道が分からなくなり大きな扉の閉つた橋の上で行き止まりとなつてしまった。見なれない私共の車に警察官が飛び出して来て尋問。確に理由の分らぬライトバンに学生ばかりが数人、中にはGパン姿の学生も居たらしい。今思うと警察官が不信に思うのも当然だったろう。（ヘルメットこそつけていなかったが……。）私達の用件を話すと分つてくれて道順を詳しく教えてくれた。がその直後、くだんの警察官の云うには「現在君達が居る場所は俗に云う“二重橋”と云つて一般国民が車などで乗りつける場所ではない」その橋の沿革と目的、使用方法などまだその当時は延々と説教され、しぼられたものでした。そんなドジを踏みながらも無事に先輩の皆さんに「30年史」を届けたものでした。

ふり返って見ると色々なことがありました。いずれも現在の私にとっては楽しい思い出ばかりです。あの当時、毎週日曜日の朝には必ず元気に馬場にお見えになり馬達を可愛がって下さった半沢道郎教授も今や御退官。烏打帽子に紺色の乗馬服、カーキ色の乗馬ズボン、黒い長靴、当時の北翠号（エリザベス）に良くお乗りになられた姿を思い出します。駕籠に乗る人、かつぐ人、更にはわらじを編む人と……。いつも“わらじを編む人”として本当に長い間我々を見守ってくれた半沢先生に末永く御健康でありますよう心からお祈り申し上げます。

昭和36年～38年



昭36・1月 日高にて



昭36 ポロ出し作業



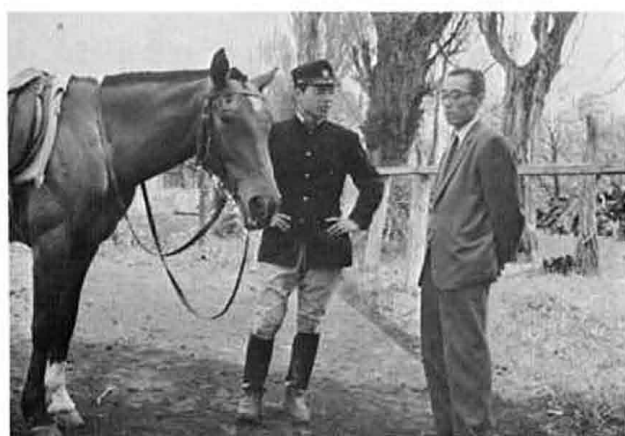
昭36 雪割り



昭36 北春離脱時



昭36 第一回酪農大定期戦時 於北大



昭36 北翔号と



昭37 学馬連講習 川口氏来訪



昭37 合宿時



昭37 合宿



昭37 試合後



昭37・5月 帯畜定期戦



昭37 東北・北海道 王決予戦 於福島



昭37 王 決



昭37 王 決



昭37 王 決



昭37 王 決



昭37 王 決



昭38・5月19日 部内競技会後



昭38 夏 北海道大会後



昭38 七帝戦 於福岡



昭38 王座決定戦 於馬事公苑



昭38 王決参加メンバー

(雑感) 思い出すまゝに 気になることばかり

昭和37年卒 千葉 祐 記

1. 馬術生活のこと

私のころは、部室は、第1農場のサイロと隣り合せの、比較的小綺麗な部屋でありました。しかし、部の財政は誠にお寒い状態で、従って、部員は映画会・道営競馬開催時のアルバイト、等、何かにつけて勤労働員されることが多かったように思います。今にして思えば、他の部員には随分迷惑なことであったでしょう。

乾草の取り入れ作業も苦しい作業の一つでありましたが今では、なつかしい思い出になりました。

1. 部内競技会のこと

1年に1度であったと思いますが、競技練習を離れて、先輩・後輩不礼講の日がありました。

裸足で、鞍の上に立ち、先着を競ったり、パン食い競争をしたり……。

しかし、馬にとっては、迷惑このうえないことであったかも知れません。

1. 外乗と北標の事故のこと

外乗は当時の部員にとっても楽しみにしている行事の一つであり、また思い出としてもなつかしいものの一つですが、当時、大障害馬への期待を担って着々実力をつけていた北標号を外乗での事故で失ったことは誠に悔まれたことでありました。

1. 日高牧場見学のこと

当時、日高実験牧場におられた下飯坂先輩のお力添えで、大場先輩の引卒により日高の原野を駆けたのは今では貴重な体験であります。

1. 新馬の調教

当時、北標号を失った時、二頭の仲間がやってきました。

一頭は、美形ミスグレース(のちの北涼)でこれは玉沢君が担当し、もう一頭は小軀、芙蓉(のちの北楊)が日高牧場よりやってきた、これは私が担当したのですが、未熟な調教技術のため、馬の能力を充分発揮させられなかったのは悔まれます。

以上、持ち合わせの写真を出して、思いつくままに当時の模様を気憶を辿って簡単につづってみました。

思い出すほどに、一つ一つの事柄は、気になることばかりで、はずかしい限りです。

未熟者の気張りを反省したことをお伝えして筆をとめます。

諸先輩及現役の皆様の方々の今後の御健康とご活躍をお祈り致します。

現 役 ・ O B ・ 伝 統

昭和38年卒 市 川 瑞 彦

後援会の加藤君に再三原稿を催促されて、何かを書かなくてはと試みてみたのですが、なかなか何を題材に書くかということが定まらない。彼の尽力を思うと断わるわけにもいかず困ってしまった。この原因の大半は勿論私の筆不精にあるのだろうが、それだけでもないような気がする。それは私が現在も北大にいる関係上、依然として“現役的環境”にいて一般のOBのように自分の現役時代を“凝縮”した形で保存していないことにもよると思うのです。本来ならばそのような“凝縮”した内容を文にするのが、この半沢先生の退官記念写真集の主旨にも沿っているように思いますが、そんなわけで私なりに現役時代のこと、現役とOBの関係などについて感じていることを簡単に記してみたいと思う。現時点でふり返ってみるのも現役諸君にとって全く無意味であるとは思わない。

馬術部の歴史を写真で眺めてみると、もう我々の現役時代もその中で一画を占めてしまっているのに驚いてしまう。少し大げさに云えば、歴史的な事実としてすでに定着してしまっていることに対する驚きとでもいおうか。そういえば何も写真ばかりではなく現役諸君から見ると我々の現役時代は何か華やかなものに映るらしく、良い面ばかりが強調され、固定化されているのをみると何か気恥かしい気がします……。それはさておき、私はOBとしての自分と現役時代の自分とをふり返ってみてこんな感慨にひたりました。馬術部では現役が現役だけで存在することは出来ないのではないかということ、言葉をかえれば他と何のかかわりのない現役はありえないのではないかということ。現役のときにいかに自由だと思っても、歴史は連続して連なっており、意識していると否にかかわらず、好むと好まざるとにかかわらず、必らず先輩の影響を受け、必らず後輩に影響を与えるものであること。それを自覚できないとすれば、それは不幸だと思う。

現役時代はやがて歴史的に定着し、評価されるし、決してそれから逃れられない……。この写真集もいずれはそうした歴史のなかの一事業になるであろうし……。

我々の現役時代は部生活や戦績面では幸運であったと思う。部生活では10人が無事馬術部を卒業できたし、戦績面では団体戦では年間無敗で、王座決定戦に部として初優勝することができたからである。部のいき方には、おそらくは永久に定まらないのではと思われる二つのいき方があると思われる（競技中心で少数精鋭主義に徹するか、競技だけでなく多数が様々な形で部活動に参加を許される形態でいくか）が、我々の時はまがりなりにも二つを両立させることができたと思う。我々はこれらのことが我々だけで出来たなどとは思わなかったし、事実として、また実感として思えなかった。例えば我々の時のA君はB先輩、C君はD先輩というように具体的に影響を受けたり、指導を受けて飛躍的に上達したりした人を指摘できるからだ。しかし、大部分のものは我々が無意識のうちに自然に身につけることが出来たのだろうと思う。知らず知らずに身につけられる環境こそが伝統であろうし、つきつめれば伝統とは先輩・後輩の連鎖の中で個人と個人又は複数と複数といったように様々な形で具体的に引き継がれていくものの総体をいうだろうと思う。伝統を受け継ぐことは必らずしも過去の

ものを固守していくことは意味しないと思うけれど、少なくともその重さ、大きさを自覚し、その貴重な財産をゆずり受けてから出発することが大切だと思う。この財産は現役時代に意識するよりはるかに大きなもののように思われる。大学の馬術部では4年間で、初心者から指導者へ、馬に教えられる立場へというのが絶対的な条件である以上、無一文で出発することのハンディの大きさは云うまでもなからう。

我々の現役時代は、北大馬術部の自馬時代の黄金時代を築いてくれた昭和29年札幌国体の馬達が老令化が目立ってきていた頃だった。我々が貸与馬では負けられないと思ったのは自馬では多くは望めないと思ったからだし、それだけに新しい馬の成長や後輩に期待したところも大きかった。自馬では帯畜大には口惜しい思いをしたが、しばらくの辛抱と思っていた。現時点で考えてみて残念に思うのは新馬への漸進的移行には成功しなかったように思われることである。これは何も我々の先輩や我々が計画性をもたなかったわけでも、怠慢したわけでもなく、当時では農場、学生部との関係で許されなかったなどが主な原因だが、マクロ的にみて残念に思われてならないし、貴重な教訓としていかなければならないと思う。これとは関係なく蛇足とは思いつけれど新馬への入替えのタイミングは現役はえてして愛着を断ちがたく誤まる危険もあり、OBの存在価値がある点だと思う。

云ってしまえばあたりまえなのだけど、現役時代は1度しか経験できない。この一回性ゆえすべてのOBは自分らの現役時代を他に代えられないも故郷のようなものと思っていると思う。それ故すべてのOBは絶えず現在の現役に注目し、期待をするのは必然であり、自然でもあろう。お節介じみた云い方になるかも知れないけれど、現役諸君はその時代のいき方に他の何物にも支配されない権限をもつということに異論をさしはさむつもりはないが、同時に伝統ある馬術部の連年の一部分を担当しており歴史的にみた責任をもつということを忘れないでほしいと思う。北大馬術部は現役は現役で、OBはOBでそれぞれの立場でそれぞれの特徴と役割を発揮して協力するとき、最大の力が発揮されると思う。北大馬術部にはまだまだ潜在力が発掘されないまま眠っているような気がしてならない。以上、偉そうな、抽象的なことを書きつらねてしまい、どれだけ自分の感じを表現できたかについては自信はありませんが、何か役に立てば幸いです。

「 勝つこととチームワーク 」

昭和38年卒 原 重 一

卒業して十年たった。この一月に市川と小出も世帯持ちにやっと仲間入りした。札幌（市川、岡田）、前橋（恩田）、東京（堀川、志水、宮崎、原）、大阪（小出）それに沖繩（清水）と、かつて“七人の侍”なんていって楽しんでいた連中も、全国に散らばってそれぞれ活躍している。

仲間が集まると、この間の市川の結婚式、小出のときもそうだったが、話の中心は、自然に札幌で

の四年間の生活のことになる。当時の思い出は誰もがそうであるようにいろいろある。ほんとうにいろいろある。

ちょうど、僕等の現役時代に「馬術部三十年史」が、刊行された。企画し、スタートしたのは大分前のことのようにだったが（正確には、昭和32年に編集委員会設置）、僕の知っている「三十年史」は、大場サン、吉田サンが精力的にがんばられていた頃からだった。

具体化するにつれ、編集の三浦クン、資金獲得の志水クン、それに引続き大場サンが中心になられ、部員一丸となって完成にこぎついた。

雪のなかを、印刷屋から大事そうにかゝえて部屋に帰ってきた三浦クンのうれしそうに満足そうな顔を想いだす。

従来、各運動部ごとにすゝめられていた「旧七帝戦」を発展的に解消し、あらたに「国立総合体育大会」（正式な名称は、忘れました）にしていこうという課題もこの頃だった。第一回大会が北大に定まり舞台づくりに、体育会、本部まわりと奔走し無事大会にこぎついた。勿論?!、馬術部は優勝で大会を終えた。

全国の美人選手が集まる「全日本女子学生選手権」でも、思い出がある。ニガイ思い出だ。

この大会は、爽快とはいえず日中は“夏”の日が照りつける八月の初旬に二日間で団体戦と個人戦が行なわれた。この大会の最終戦で、東大の女子選手が落馬した。落ち方も落ちたときも観戦していた僕等はたいしたことはないと思っていた。一応北大病院に運ばれた。それからが大変だった。思いもよらぬ重傷である。たゞちに、脳外科の教授による手術が行なわれ、一時はほんとうに心配した。幸適切な手当により順調に回復、一同、ほっとしたものだった。その後の彼女は、法学部を最優秀な成績で卒業され、無事社会人となられた由である。

久しぶりで、当時の写真、新聞の切抜き、部報を見返してみると、自然に連中のことに思い出が集まる。僕の口からいうのも変な話だが、僕等の仲間は、わりに人数も多かったのにことのほか仲がよかったような気がする。それは部活動のなかで、それぞれの人間が、なんらかの形で責任ある立場にたっていたことによるものと思われる。

記憶は、はっきりしないが、千葉サンの代から引きついで3年目の後半、たしか清水の下宿でだったと思うけれど、キャプテン以下をきめるときに、皆が責任を分担して“キャプテンにロードがかゝりすぎることをなくそう”“忙がしいが故に、やむおえず退部していくことをなくそう”“終りを全うしよう”なんていうことを議論したことを憶えている。このためか、選手としてばかりでなくバック部門的なことを率先引受けてくれた者がいたり日常の活動も、比較的スムーズにいったように思う。

いつか東京のOB会の席で、森本サンが“いづれにしても、短かい4年間の部生活なんだ。そのなかで、できれば「勝つ喜び」を味わいたい、味あわせてやりたい……。”という主旨の発言されたことを憶えている。

幸、僕等は最後の年に皆で勝つことができた。しかも、僕自身、選手として勝つことを味わった。

馬術論は、未だによくわからないが、馬術部運動部論からみると、結果としての「勝利の美酒」はひとつの目標であろうと思う。できるだけ多くの人が、味わえれば喜びをより大きく深くなる。

僕等が「勝利の美酒」で卒業できた背景には、勿論、当時の八木クン以下の現役部員のバックアッ

半沢部長をはじめとする先輩達のあたゝかい励ましがあつた。

御存知のように、札幌の12月は通常の練習ができない季節である。最後の王決に備えて、早朝の練習を試合前の二週間程組んだ。当時、一年目の諸君が連日練習場に姿を表わし、馬装から練習終了までバックアップしてくれたことが印象に残っている。

東京の大学の連中のところで、いつもびっくりしたことは、上級生と下級生が歴然としていたことだ。最初のころは、あまりに四年目の“権威”が強いのに驚いたほどだ。

それだけに、早朝、くらく寒いなかを、自主的に出てきてくれた部員諸君の姿は僕等にはうれしかった。

試合前の様子も、大分他とはちがっていたのではないかと思う。僕等は非常にリラックスしていた。それは、もちろん大試合の前の緊張感があったろうが、なにか皆で試合に参加できたうれしさ、楽しさというものがムードとしてあつたような気がする。選手の未席にいた僕自身についていえば優勝できるとは思わなかったが負ける気は全然なかった。

それでも試合までには、いくつかの波があつた。負けていたら、あれこれ負因のひとつにもなりそうな小事件は少なくなかつた。選手同志でも、キリキリ、カリカリの場面がいくつかあつた。勝つたから、表面に出ないで済んだ部分である。チームワークなんて案外もろいものではないかと思う。共通の目標が達成できたから、より強固になったチームワークといえるのではないかと思っている。

優勝のあと、在京OBが、早速、祝勝会を開いて下さつた。僕等よりという意味は、勝つて、OBがこんなに喜んでくれるとは、その場面に至るまで気がつかなかつたということである。

このことは、札幌に帰ってからの在札のOB、現役部員の場合も同様であつた。

僕等の幸運は、大場サン、千葉サンの代から、八木君以下一年目の諸君に至るまでの部員のなかで達成できた喜びであつたと思っている。

馬術が、馬と人間の個の結びつきで成りたつスポーツであることは改めて云々するまでもない。スポーツを個人ゲーム団体ゲームに分けた場合個人ゲームとしての色彩が強い。極論すれば“ゲーム”ではなくて“ショウ”だ“スポーツ”ではなくて“芸術”だという人もいるほどだ。

馬術論・馬術部運動部論あるいわ馬術家論と馬術選手論は、この辺から様々な立場、意見がでてくるのだろう。できていいのだろうと思う。そこで必要なことは共通の目標を、どこに見いだすかということにあるような気がする。“目標”はもちろん達成する過程も意味があり、重要だと思いが、達成したときに、開花し、結実する。

今、一般に企業では、従来のライン制ルーチンワークだけではこなせない仕事をどうして遂行していくかが大きな課題になっている。そこで、プロジェクトチームとかスタッフ制とかチームづくりが組織論が盛んである。

僕の日常の仕事も、個々の仕事をプロジェクトチームで処理している。この場合まづ腐心することは、共通の課題を発見することと共通の目標を設定することそして個の責任をはっきりさせることにあると考えている。あとは“仲よくやろうや”である。

実際は、口でいうほど上手いかないわけだが、“既七分に乗り三分”とか“懲戒と愛撫は紙ひとえ”なんていうことばは、案外、世の中の共通の格言ではないかと思つたりしている。

人間集団という奴は、わづらわしいことも多いが、実に面白く、いろいろなことがある。当時の生活を思いだしながら、ここまで書いてしまった。

1974.3.17 日曜日

王 決 優 勝 の こ と

昭和39年卒 恩 田 正 臣

第5回全日本学生馬術王座決定戦(昭和37年12月)で優勝したことは、大きな思い出として、いまだに心に焼きついています。同時に、それを達成するためにした努力、とりわけ、卒論のテーマにとり組んでいた4年生が、それぞれ都合をつけて、出発前に雪の中で一週間行なった合宿のつらかったこと、などが思い出されます。その時のメンバーは、玉沢一晴(現山之内製薬)、岡田征至(現拓銀)、清水洋(現農林省)、志水一允(現農林省林試)、原重一(現交通公社)、堀川芳男(?)、八木正己(現札幌市役所)、小島武(鐘ヶ淵化学)と恩田正臣(現群馬県庁)の九名でした。市川瑞彦(現北大助手)は病気療養中で出場できなかったのは、我々としても残念でした。

我々の優勝は、チームワークの良さが最大の原因と思っていますが、選手の粒がそろっていたことも原因としてあげられると思います。当時の部報の戦績をみると、6名戦で4試合を行なった中で、同じ馬で対戦した相手チームの選手との勝敗を比較してみると、24戦中15勝4タイ5敗と、圧倒的に勝っています。とくに優勝を決定した対関西学院大戦では、4勝2タイであり、喰われた選手は1名もいませんでした。6名戦で、弱いところがなく、全員がまかせられる選手ばかりでチームを組めたということは、こんな強味はほかにないことです。

この試合で堀川と恩田は、4試合全喰いの好成績で、審判団は最優秀選手の選衡に迷ったようですが、恩田がその榮譽を受けさせていただきました。

なおこのメンバーは、将来、文芸春秋のグラビア「同級生交歓」に出してもらえるようになると約束したとか。

不 帰 の 季 節

昭和39年卒 三 浦 清一郎

すでに馬術部を出て11年である。振りかえればぼくが自分で自分の道を選択し、選択した結果に

責任をもつという生き方を始めたのは、北大馬術部へ入部するという“選択”をした時から始まったといっても過言ではない。中学・高校と故郷の町で平凡に暮した。いろいろ夢もあり、不満もあったが、基本的には、文句をいながらも、人が決めてくれた道を忠実に辿ってきた自分であった。だから北大への入学と同時に自己裁量の余地を与えられ、自由に使える時間を手にしたことは胸のすくような快感であった。あれは恵庭寮の南寮10号室であった。5時半に起床。今はもうすでにないが、楡影寮の裏の線路みちをポプラ並木の馬場まで歩く。かつこうがないていた。北海道へ来るまでかつこうの声などきいたこともない自分であった。雪山をめぐってきた風は冷たかったが、タンポポが一面に春をまき散らし、こぶしの花の白さもまぶしかった。ぼくの人生であんな美しい季節はなかった。

学問の府たる大学にかけてきた希望がかたっぱしからついで去り、しよせん大学に夢などかけることがまちがっているのだと実感したとき、ぼくは自分の学生々活、ひいては人生を、拙いながらも自らの手で設計することに腹を決めた。当時の日記で、ぼくは次から次へと湧いてくる己れの好奇心と、新しい活動への欲望にさき得る時間が余りにも少ないことをなげいている。

ぼくが馬術部から学んだことは実に様々であるが、中でも最も重要だと思われるものは“持続力”ということであった。自らが選択し、自らの手で設計していきこうという生活の中で、まさに精神の強さとは持続力のことであった。あとき馬術部を選ぶことは、他の活動を断念することを意味していた。興味の湧くままにあれもこれもやりたかったどん欲な時代に自分の活動を馬術部だけに限定せざるを得ないことは、辛いことであった。この苦しさは自分の好奇心と冒険心に振り廻された人でないとなかなかわかってもらえない。ぼくの尊敬する友人の中にも二つの典型的なタイプがあって、馬術部に沈潜してすべてを知ろうという型と、自己体験の地平線を広げて、馬術部以外にも様々な世界を認識したいという型であった。馬術部の道半ばにして、自分の欲望にひきさかれ、うしろがみをひかれながらも止めて行った友人達にはこの後者のタイプが多かったように思う。もちろん当時の馬術部は他のクラブに比べて極めて多忙であり、時間的に別の活動にも関係するということはまず不可能であった。ぼく自身も何度かいくつかの別の活動への欲望と馬術部活動の持続との間にひきさかれた。その度に部の友人諸兄弟の有形無形の応援をいただきかろうじて持続をつづけ得たのである。

このように自分の生活の様々な分野の欲望を調節しながら部活動を続けることは、“続ける行為”それ自体に意味があった。それは忍耐と克己、更に“持続”を意味あるものにせんとする創造力を必要とする。ぼくの精神にとって馬術部が貴重なのは、この“持続”への態度をたたきこみ、持続力への自信を植えつけてくれたことである。このことは馬術部にどんなに感謝しても感謝し過ぎることはない。

時は流水の如し。去って帰らず。青春は不帰の季節である。帰らざる季節の中で幾人もの人に巡り会った。ごぶさを重ねているせいか、思い出す一人一人の顔がまだ学生時代の顔である。逝ってしまった馬達の顔も忘れてはいない。馬術部の季節はさわやかで、風景は美しかった。遠くからながら、北大馬術部の発展に心からの声援を惜しまない。

昭和39年～41年



昭39 北大馬場にて



昭39 七帝戦 於京都



昭39・11月 畜大定期戦 於帯広



昭39・12月25日 東北大定期戦 於仙台



昭39 全日本学生自馬大会 於馬事公苑



昭40 雪割り



昭40 部内競技場



昭40 酪農大定期戦



昭40・6月 北秀(デコ)誕生の瞬間



昭40 七帝戦



昭40 関東北戦



昭41・5月 部内競技会



昭41・6月 遠乗会



昭41・7月 日高合宿



昭47・7月 東日本大会貨車積



昭41・10月 札幌自馬大会



昭41 部員一同

四、五年間の記

昭和37年入学、41年 高野文彰
42年度卒業 黒沢道雄
近藤喜十郎
八木沢守正

私達は昭和37年総勢36名が入部したという記録を持つ代の残党です。私達の他に小栗、山村、松尾、高橋、八木多賀子の合計9名が卒業時まで居残りました。私達の在部時代の思い出は、新入生の時の部内競技会でロデオの優勝、2年目の夏東京遠征（東北大、学習院、青学、明治、法政との対抗戦）、2年目秋の静内御料牧場での第n次合宿、4年目の夏、名古屋での七帝戦の優勝、その秋の岐阜国体での小栗君の活躍等々盛り沢山のものがあります。このうちまず静内でのn次合宿について回顧します。

参加者は近藤、高野、河合、沼田、八木沢、山村でした。全日本に出場する馬匹を貸車積した翌朝、札幌を出発しました。一行6名は昼頃、下飯坂先輩に迎えられて静内に昼頃着きました。翌朝、霜を踏みながら、11月の青空の下で、林徳、干徳他6頭に騎乗し、小高い丘にてヤングマグニフィセント6の撮影会を終了。そのあと桜並木の20間道路を6頭並列駆足で走り出して100米も行かないうちに馬が横にはねた為、N君が鞍上に人なく電柱と大衝突。静内の産婦人科病院分娩室にかつぎこまれるハプニング。満足に騎乗せぬまま泣く泣く札幌へ帰りました。

話は飛びますが、七帝戦優勝の感激も忘れられません。4年目になって七帝戦向けの40日間の恵庭寮での合宿をおさめ、関東東北選手権大会に福島に遠征し、決勝戦にて一敗地にまみれ、2位となった時のくやしき。小栗、高野、山村が頭を丸めうなだれて札幌にもどり、七帝戦の優勝を全員で誓い、勝つ事のみを心に秘め、一路名古屋は森林公園に向かった事を思い起します。宿舎に着いた時、階下から聞える絶えなる琴の調べに思わず窓に顔を連らね、九大、東北大、そして東大も期せずして顔を出し階下の座敷に互に目をやりました。決勝戦の前夜、北大さんだけおよびがかかり、明日の大事な試合をひかえはなはだ不謹慎とは思いながら、招かれて行かざるは男子一生の恥と、他校の羨望のまなざしを尻目に座敷へ入った時。彼女達K女子大箏曲部全員が心をこめて北大馬術部の優勝を祈って奏でる曲……「落葉する頃」……勝ちました。純銀に金の菊の御紋章の入った東久瀬杯を手にして、ビールを満たして馬装のまま口をつけた時、あのビールのにがかった事。

今思うに、入部の年、市川、恩田、志水、清水、原、岡田、堀川のマグニフィセント7の17連勝は私達に学生としての馬術を言葉なくして語ってくれた気がします。卒業後8年を過ぎた今でもあの時の日本一になった誇りは胸の中に生きています。

思　い　出　の　記

昭42年卒 加藤正昭

何の因果で馬術部に入部したのか、自分でもよくわからぬ、不可思議な決断でもありました。まだ理学部横に第二農場事務所があり収穫庫の2階で初めて経験した運動部の合宿1年目はきわめて不良なる部員でした。王決の輝しい戦歴をしばしば伺いました。

2年目になりかろうじて並の部員としての練習をするようになり馬も好きになった次第です。北飄・北櫻全勢でした。夏には変型道大会が旭川で行なわれ、貸与馬に出していただきました。そして3年目ようやくまじな部員となりそのころの小栗主将にたてつくことしばしば、イタリー式に反論したりもしました。役員を交代し部の責任を荷負ったとき、いろいろな難問にぶつかり大きな経験となりました。北櫻号という愛馬と田中倬君という親友を得、自分としては非常に充実した時期でした。しかし戦績は芳しくなくその点では部の責任者として悩みの時でした。

4年目になっても練習量はあまり変わらず、学校の方では“おかしいのではないか”などという目でみられたりもしました。

なんとか卒業できた次第です。振り返ってみたときに最も感じたこと。一つ友人を得ること、今一つ馬というすばらしい生き物にめぐりあえたことです。

よきにつけあしきにつけ大きな影響力をあたえてくれました。

昭和42年～44年



昭42・1月 朝清号 離脱



昭42・1月 新年会



昭42・4月 新入生歓誘



昭42 秋頃



昭42・8月 北日本大会



昭42・8月 北日本大会時 於帯広



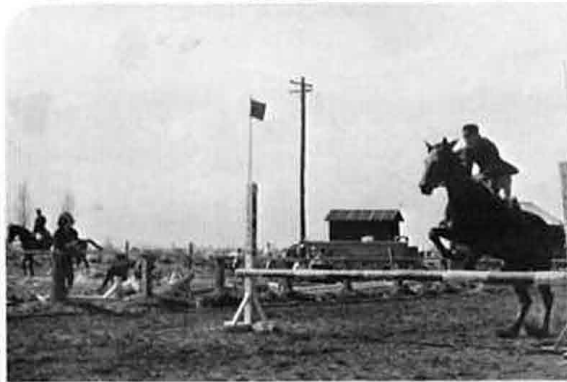
昭42・8月 北海道大会 於北大



昭42・11月 全日本学生自馬大会



昭43・2月



昭43・5月



昭43



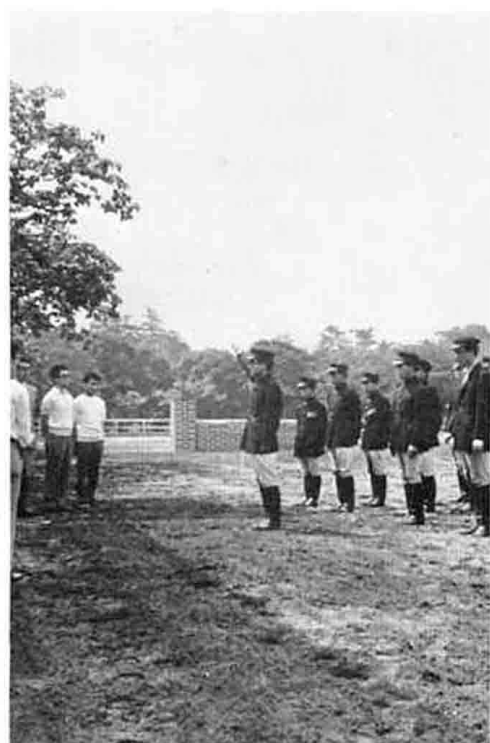
昭43・7月 日高にて合宿



昭44 初詣で



昭44 春 遠乗会



昭44 七帝戦



昭44・6月 ヤブサメアルバイト



昭44・6月 札自馬戦



昭44・7月 日高合宿

卒業までの思い出

昭和44年卒 田 中 力

我々の入部した年昭和40年は小栗主将のひきいる北大馬術部が七帝戦に優勝した年であった。あの銀杯で飲んだビールは実にうまかった。小栗主将のひきいる4年目には実に個性的な人達が多かった。女房役にはもってこいの山村さん、眠り狂四郎のあだ名の通りの高橋さん、我道を行く感じの近藤さん、めったに練習に見えなかったが御術のうまい八木沢さん、黒沢さん、高野さん、それに良き姉御の八木多賀子さん（結婚してもなぜか姓が変わらない）エトセトラ。考えて見ればめったに揃わないメンバーではなかったかと思う。それと青毛の北飄号。彼女は温和しく素朴だった。我々1年目は栄光に満ちた4年目と、北飄、北翔といった名馬、北晨、北彗というホープを見せつけられ、我々も一つ頑張ろうと仲間達で話して熱心な連中数人で、上級生になったらどの馬を担当するかまで大体決めていたものだった。

しかし現実にはそんなに甘いものではなく、次の加藤主将の代もその次の五十嵐主将の代もさして良い成績をおさめることは出来なかったように思う。しかしこの間は従来の方法から伊式の本格採用と研究、小栗コーチ山村コーチの就任という大きな変化があった。

私自身にしては北飄号の死という一生忘れられない事故を惹きおこしてしまって、入部当初からの夢が一挙に崩れ去ってしまった。いや、それよりも北大馬術部の大事な馬を殺したことに大変責任を感じて退部を決意したものだ。ところがどうして卒業間際まで馬に乗っていたか、3年目の秋、北飄が死んでから主将であった春田君に退部したい旨話すと、「北彗をお前にまかせる。もし調教に失敗すれば離厩させる」といわれ、逆に励まされてしまった。罪ほろぼしのつもりで今までの技術を何とか北彗に生かしてみようと退部を留ったわけである。事実当時の北彗はデビュー当時よりも調教が崩れていた。私は当時の伊式一本の部のやり方を敢えて無視させて貰って体軀の柔軟運動に重点を置いて、「肩を内へ」をかなり多くやった。乗り手の下手なのは、この際「おあずけ」である。私が馬に跨ったら何が何でも乗手のいうことを聞いて貰わなければ困る一、という大分乱暴な主義で乗ったのだから彼にして見れば、たまったものではない。それでも私が4年目の春あたりから皆の協力で少しづつ良くなって来た。そして5月の対酪農大定期戦に何とかゴール出来た。しかしその間、ピーエルスターというサラブレッドの牝馬が手術で死ぬということがあった。この馬は小野さんの仲介で手に入ったもので、不妊のため貰ったのだった。寺崎君が調教にあたっていたが、大きなサラブレッドに50Kgに満たない寺崎君が乗っているのは何とも妙な風だった。

北彗は7月の北海道自馬大会で惨敗を期したがその後また調子を上げて8月24日の道大のときは、複合で初めてゴール出来た。中障で7位だった。この1年間の苦勞の甲斐があったというものである。マネージャーとは名ばかりで、半沢先生はじめ先輩後輩同僚の皆に迷惑をかけながらの1年だったけれど、この成績なら皆もよろこんで貰えると思った。

この大会で北翔は新潟国体に参加したが振わず、結局我々の代も大したことがなく終わったのだった。

昭和45年～現在



昭45 初詣で



昭45・2月 北翔号 離厩



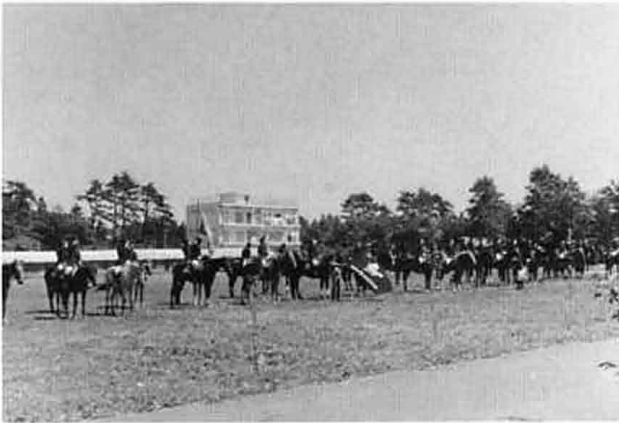
昭45・6月 練習風景



昭45・7月 手入れ



昭45・10月18日 役員交代コンパ



昭46・7月 北日本学生馬術大会 於十和田



昭46・8月 北海道大会 於旭川



昭46 日高にて合宿



昭46 秋 遠乗会



昭46 2年目一同



昭47・3月 雪かき



昭47・5月 酪農大定期戦 於江別



昭47 日高にて合宿



昭47・8月 北日本大会



昭47・10月 北辰号 離厩



昭47・10月 全日本学生馬術大会 西村氏
於馬事公苑



昭48・3月 合宿時



昭48・6月 草刈り大会 於厚別



昭48・8月 北日本学生馬術大会 於帯広



昭48・7月 日高にて合宿



昭48・10月 全日本学生馬術大会 則近氏

名馬の思い出

昭和46年卒 松 井 亮

私が2年目の秋、札幌中央競馬で足を痛めた“チカラ”という馬が入厩し、北力号と名づけられた。当分の間私が馬配ということで雪のちらつくポプラ並木を毎朝ひき馬したことを覚えている。性質は非常に荒いところがあり、うっかり前を通りすぎようとするとたちまちガブリとやられたものである。今でもその時の傷跡が体にいくつか残っている。

烈悍と言うのか、カーッと怒ることがあった。いつだったか、獣医からの帰り、向いから走ってきたトラックを、すれ違いざまに蹴っ飛ばし、窓ワクに蹄があたってガラスが割れ、あやうく運転手を殺しそうになったことがあった。春田さんの調教でめきめき良くなり、私が4年目の春の酪農定期戦では中障に出るはずであった。北秀、北凜、北力の3頭のうち勝った馬が新しい鞍を使うのだという賭けまでして楽しみにしていたのである。ところが練習中の人馬転で再起不能となってしまった。人馬転をしても人馬ともピンピンしていることさえあるのだから、全く不運であった。屠場へつれて行き、つないで帰ってくる時の力の不安気な目は今でも忘れられない。力をかわいがっていた山下君はポロポロ泣いていたし、春田さんは「いやなものだな」と一言言っただけだったが、その苦しみを抑えて、北彗の調教に努力を払われたことに対しては本当に有難く思っている。

力はダービー12着の実績をもっていたから、そのバネも抜群であった。そして駈歩の反動の柔らかさは他馬には見られぬものだった。北大のエースとなり得なかったことは残念であるが、短期間とはいえ、このようなたぐいまれな能力をもった馬にのれたということは、極めて貴重な経験であったと思う。

コンパのいろいろ

昭和47年度卒 今 井 敏 郎

僕らの代は、水産学部へ移行した後も馬術部を続けた中村を加え、梶村・榊井・大見・今井の5名が卒部することができました。この文は本来、主将を務めた梶村あたりが書くべき所であろうと思いますが、彼は東京に居ることでもあり、代りに僕が思い出話でも書いてみようと思います。

まず、残念なことではありますが、僕らの代には、この四十年誌のような、クラブの記録として後世に残るものに紹介するような立派な成績は何もありません。多大の御恩を受けた諸先輩に報いるには立派な成績をあげることが第一であると思われませんが、特に半沢先生に喜んでいただけるような成績をあげられなかったことは心残りです。

半沢先生には馬場移転、厩舎新設という大事業に際して多大なお骨折りをしていただいたわけですが、僕らはちょうどこの時期に4年目役員をしていましたので、半沢先生の研究室へ行ってはいろいろお話をしたり、先生の後にくっついて大学本部へ行ったり、このことではいろいろの思い出があります。

また半沢先生といえば、もう一つ半ば驚異の感をもって思い出す事があります。それはコンパというコンパにおいて先生のお顔を拝見しなかったことがなかったことです。ずい分お忙しい御身と存じましたが、とにかく万障繰合せて毎回出席していただけるのがたいへんうれしかったものです。

さてこのようなクラブの公式コンパだけでも年間相当の回数あるわけですが、それ以外のプライベートな非公式コンパについてはそれぞれの世代で様々な思い出があるものと思われまふ。僕らの代は3年間程は第一農場内にあった旧馬場、厩舎、部室ですごしたわけですが、秋農場でトウモロコシもぎのアルバイトをやった時にわけてもらったトウモロコシをゆでて喰ったこと、イモの収穫時期はイモで飲んだイモコンのことなどなど……。話は変わりますが、北24条は現在地下鉄の駅であるため、第2の繁華街となっていますが、その一角に旧態然とした平屋木造建築物が今でもあります。それは加藤正昭兄の所有するところのものでありますが、以前そこに春田兄と梶村が同居していた時代があります。冬なぞは屋根に雪がつもると朝玄関が開かなくなるといったふうで、春田兄に雪おろしを手伝わされたこともありました。そこで大々的に催されたスシコンなるコンパは実に楽しいものでありました。種々のネタと飯を用意した後、号令一下めいめいカマに手をつっ込んで飯をにぎり、思い思いのネタをつけて喰うといった趣向で、これはもう部屋中めし粒がちらばるすさまじいコンパでありました。あんなに腹いっぱいスシを喰ったのは、後にも先にもあの時くらいであろうと思われまふ。

僕らにはまた3年間をすごした旧部室にまつわる思い出が数多くあります。今でもあの薄暗い石壁の部室に学ランや乗馬ズボンがかかっている長靴が雑然と並んでいる部室の様子を思い浮かべることが出来ます。冬の当番で泊りの時など雪の吹込む窓ぎわのベッドではダルマストーブで半身ずつ暖めながら寝たことや、二段ベッドの上で話す先輩のことばを聞きながらうつらうつらしていたことなどを思い出すとなつかしくなります。そういう環境の中で馬術に対する情熱は人後に落ちないものを持っていたと思います。特に榊井・梶村の驚異的な鞍数は馬術部の長い歴史を通じて1、2を争う程であろうと思われまふ。4年間通して結果的には良い成績をあげられなかったものの、小栗コーチにしぼられながらイタリー式馬術を学び身につけようとした4年間の努力は、自分達にとっても、クラブに対しても決して無駄なものではなかったと確信しております。

卒部 1 年後の雑感

48年卒(獣) 田崎拓昭

5年前、頂度小生が馬術部に入部した年、それが部創設40年であったと記憶しています。在部中毎年40年史編纂の話がもち上がり、3年生の時編集小委員会なるものがあつたにもかかわらず未だ発刊されていません。

在部当時、40年の馬術部にとっては大変革といえる、伊式自然馬術の採用や新厩舎・馬場への移転等を経験した我々としては、30年史につぐ40年史の編纂は当然の責務であつたろう。それについては部員の意欲不足はさることながら、卒直に言って年来の戦績不振が大きなネックになっていたように思う。

ともあれ、今回半沢部長の御退官を機に後援会を中心に写真集が企画されたことは、小生にとっては一つの救いとも言えます。

卒業後、鹿児島島の片田舎に引っ込んでしまった小生にとっては、まさに在部中の4年間は、青春そのものであつたように思えてなりません。特筆される程の戦績も、後輩に譲れる程の馬も残せなかつたとはいえ、一種の誇りがありました。それは終始伊式自然馬術方式の追求に努力したことであり、我々にとって小栗コーチの役割は重大でした。北大馬術部には「小栗兄ありて自然馬術あり」でした。

そんな訳ですから、小栗コーチ辞任のしらせを聞いて非常に失望しているのですが、馬術部が現状の方式により活動する限りにおいてこのことは最大のマイナスであると思えてなりません。馬術部が運動クラブとして勝・負を第一義とする限りにおいて、部員全体の完全合議による運営などあろうはずがない。これは現役時代自分もぶつかった難題ではありますが、あえてそう断言します。

部員一同常勝北大の再興を目ざして奮起してください。

北大馬術部に栄光あれ！

迷 妄 の 中 か ら

48年度卒部 則 近 彰

20数名の45年度入部者は、46年度の終り2年の後半に8名程になった。ポプラ並木横の馬場からその年の秋、今の馬場に移った。工学部の拡張と、文部省の木造建築物の数年に亘る倒壊方針によって旧農場倉庫もその煽を喰ったわけであった。そしてそれに伴う馬場、厩舎、部室の移転問題は、そういうことが噂され始めてから既に数年に及んでいた。その間、顧問半沢先生の御尽力たるやちよっと我々には考えられないものであったろうとは容易に想像される。何もわからぬ2年目の分際ではありながら、端々で耳にするのは例えば「学生部じゃダメだから本部へちよっとね」とか「君達じゃダメでしょうから私が何とかしましょう」とかいうやつで、我々の手の届かぬ所での御活躍を感じ取っていたものだった。

その移転が無事終了した年も終りの合宿で一つの事が起きた。2年目が全員部を離れた。3ヶ月してNと私とは再入部した。この間の部内は正直いってひとり立ちしつつある1年目部員の肩に重くのしかかった。2年目各人の考えの中の共通性は、結果からは殆んど我部の歴史の中に繰り返されたもので強弱の相違でしかなかった。そこにあった如き考えやその方法など語るに落ちるとてんで相手にしない、或いはする必要は全く無しといった部の強さや大いさは歴史に根ざすものであったと思われる。唯極めて尖鋭な先細りの勾いがあった。私の独りの考えの中では完全無比の強さとうまさとを志向せねばならないものであった。混頓たる手足のない達摩の思想などは、過去から現在へ脈々と流れている部員個人個人の行動の中に一蹴されるものであり、又それこそが馬を養っているものであった。半沢先生には色々と心配をおかけしたことであった。

4年になり半沢先生御退官に伴う部長交代があった。獣医の河田先生にお願いすることになり、半沢先生にはよく一緒に獣医まで行ってお願いしていただいた。河田先生も快くお受けになって下さった。更に同好会幹事が市川さんに代わり内容に於いてスッキリとした形となりつつあった。種々の混乱はあったが後に残っているのは全日学で優勝する馬や人員を出すことであった。強くならねばならない。迷妄と恣意を以ってしても強くならねばならなかった。しかも恣意に終ることなく。

4年目2人のうち副将のN君は真の力となり部員を引きづってくれ部員もよくそれをがまんしてついてきてくれた。彼との議論でお互い腹の立つことが多々あったにせよ彼がじっとがまんしてくれることの方が多かった。結局はもう少しで千里馬が全日学へ行けたのに、彼よりも責任頭数の少かった代わりを北隼にかけた僕がゆくことになった。少くとも2人以上で行きたかった！

年々年々練習や部活動が墮落してゆくという話を耳にしながらその都度部員が如何にその事に腹立てていたかを最近考えるようになったが、部員の立場で最大の力を発揮する為には、その立腹のエネルギーを練習に向けることであるし、そういわれることはそのこととして客観的に受けとめれば、自分の自負のエネルギーが、その裏打ちされるものにどの程度堪え得るものかどうかが理解できるだろうとずっと思っている。強くならんことを祈りつつ。

現主将 景山 博文

昨年10月則近兄より主将の任を引き継ぎ早くも10ヶ月近くなりました。その間一月にはそれまで6年余りコーチであった小栗コーチが辞められ、また3月には新馬の調教をお願いしていた数人のO・B.の方々も卒業や学業の関係から馬を降りられ、4月からは文字通り現役だけのクラブになりました。小栗先輩がコーチの任から退かれることにより部がそれまで追求してきたイタリー式の確立という理想はうやむやになってしまうのではないかと、或いは、これから部はどの方向に進み何方式でやっつけようとしているのか？といったことを懸念されている方もおられることと思います。このことについて少し述べてみたいと思います。

まず僕らはイタリー方式を踏まえ、その原則にのっとってやってきたにしても、その方式、原則を実践するベースとなるだけの騎座、脚、拳が余りにも不足しているように思います。僕らは今の北大馬術部に対してなされている批判——「高校生以下だ」「北大の調教審査は採点する気にもなれない」等の言葉を素直に受けとめるべきだと思います。注意しなければならないのは、これらの言葉は何ら僕らの方式を批判しているのではなく、批判されているのは僕らの技術の拙劣さ以外の何物でもないということです。この批判に対して「我々は他と違う乗り方をしているのだから」或いは「我々の採っている方式の騎座は云々」と逃げることは筋違いだと思います。スポーツに於いて問われるのは自らの研ぎ澄まされ練磨された肉体と感覚だけです。作家が彼の創り出した作品によってのみ評価されるのと同じ様に自らの肉体と感覚でなした事によってのみスポーツもまた評価されるのであって、そこに言葉が介在する余地はないと思います。

僕らは真剣に馬術に取り組み、練習時間、鞍数に於いて決して他にひけをとらないと自負しています。仲々成果が挙らないのは従来採ってきた練習方法では騎手の養成ということに限って見れば余りにも不合理、余りにも無多の多いやり方であったと言ってよいのではないかと思います。そこで僕らは2月以来練習方法について4年目で徹底的に話し合うと共に3年目を交えても話を進めてきました。(このことについて「完全合議制」だの「多数決で運営している」といった誤解をしているO・B.の方もいらっしゃるようです。)僕らはまず下級生に於ては「馬の動きに随伴していけること」上級生に於ては「馬に自分の意志を伝えることができること」を目標にして練習を進めて行こうと思っています。従来の最初から前方騎座の姿勢の形をとることだけを要求したやり方では、なかなか騎手は馬の動きと関係ある動きができるようにならないし感覚も鋭くなっていかないと、言われれば人形だ。」という批判もそのあたりを指摘されたものだと思います。

現在の自馬での試合に於いて選手が頼るのは普段の毎日での調教でつちかわれた愛馬との信頼感だと思います。一方部馬は下級生の練習にも供せられなくてはなりません。ここで下級生の練習の為に部馬を犠牲にする、或いは馬の為に下級生の練習を犠牲にすることがあってはならないと思います。

大学馬術部では毎年多くの新入部員を迎え、最上級生は常に馬歴4年の者が占めるわけです。部馬はこれらの新入生の教育にも使われ、試合も目差さなければならぬ運命を持っています。

4年間という限られた時間で騎手を一人前にする。馬も試合に於て持っている全能力を発揮できるように調教を進めていく、二つの一見矛盾する目的のそれぞれを最も効率よく達成する為にも練習方法、内容の検討は重要なものだと思います。発想の仕方はあくまでも単純で馬場の中から生まれてくる言わば「現場監督」的発想です。この文字通り足が馬場を踏みつけている地点での認識を出発点にしたいと思います。

上級生になり「馬に自分の意志を伝えることができること」ができるようになったとき馬に対してどのような目的、思想をもって働きかけるかといった「方式」が始めて問題になってくると思います。そのときこそ部が今まで追求してきた自然馬術の思想、原則が大きな力となって僕らを導いてくれるのだと思います。そのときこそ始めて『鋼鉄の如く緊縮し悍威に富み沈静と確実性と良好なる意志とを以って最も困難な諸障碍でも朝飯前の仕事でもあるかの如く飛越しつつ悠々全コースを駢歩通過し何のことはなく見る人をして魅了してしまう。』ような勇猛果敢なる障碍馬を僕ら自身の力と組織力で作り上げることができると思います。

現在僕らは他のどの大学に比しても、まさるとも劣らない施設を持っています。そして「北大馬術部」という5つの文字の下に結集しそこで自らの青春を賭けた幾多の先輩達が嘗々としてきづきあげた伝統があります。僕らはその栄光を思うとき畏敬の念とともにより一層の前進を思う願いが体の中に溢れて来るのを禁じ得ません。

北大馬術部に栄光あれ！



昭和49年現在 部員一同



現 部 室



旧 部 室

編 集 後 記

夏も、もう盛りになろうという今日この頃です。最初の予定では4月には出版する予定でしたが約半年も遅れてしまい皆様には色々と御迷惑をかけました。ここでお詫び申し上げます。

特に大事な写真・資料を貸していただいた会員の皆様、また獣医学部の井上氏には写真の複写等で御多忙の中、協力下さいましたことを、この紙面にて感謝させていただき後記と致します。

編集委員一同